Jan 1899
no. 479

明治三十二年一月十日

女學雜誌

第四百七十九號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十九號目次

◎社說

新正一轉の心

年々の成長

田家の烟（進詠）湯谷磋一郎

◎評論

廿世紀前一年の新年制（無識齋）

◎家庭

心の規律

躰の規律

伊藤圭介翁の家訓

◎史傳

基督降誕の夜の景色

基督降誕祭の祝文（福道馬陵）

◎雜錄

猶、神に入る（櫻井鷗村）

音讀の害弊（青柳有美）

評釋戀八計柱暦（八濱揃崖）

◎隨感

除夜會◎怪しき逃散◎長恨の佳人に問ふ◎卓識なし手腕なし◎吾黨に賢な君さんや

◎時事時文

新年新感（鷗村）◎明治音樂會の近況（有美）◎金色夜叉◎山鹿素行大石良雄◎眉綮誠◎女子書翰文◎座右の銘◎陸軍の光

社告

◎本誌は每月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

◎女學雜誌定價表◎

前金	壹册定價　拾錢 半年分定價　壹圓拾錢 一年分定價　貳圓 （內國無郵稅）	代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事
廣告料	一行（廿七字詰）一回　前金拾錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引	
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし郵便切手にて送らるる人は總べて一割増にて計算せられたし	

明治三十二年一月九日印刷
明治三十二年一月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治

印刷人　布川孫市

東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

社告

女學雜誌前金定價改正の事

女學雜誌前金定價は。上段の表、記載の如く相定め來り候處ろ。前金、後金、混雜いたし。受取計算の節、往々行違となり、御手數も尠からず。弊社に於ても、往々御氣の毒いたし候事、殘念の至に付。今後は、前金頂戴の節、上表記載の如く（一年二圓即ち一册八錢三厘餘の割にて）計算いたし、後金は惣て、一册十錢の割にて、計算可仕事に、一定候間。不惡思召被下度候。右御斷り申上度謹言

但し右新規則は來る三月より實行可仕に付。前金滯の御方は、二月中に御拂込被下、一時御清算被成下候はゞ仕合と存候

明治三十　年一月

女學雜誌社會計

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百七拾九號

明治三十二年一月十日發兌

社説

新正一轉の心

逝く年を送りて來る年を迎ふ、送迎の間一髪なり。同じき門に立ちて、表てし亦は裏すれば、陰陽の差一歩なり。除夜、更たけて万籟閴たる刹那、忽まち一百八の曉鐘を耳く。黒雲霽れ、濃霧散ずるところ、東天一帶に紅かし。陽氣全地に渡りて、鳥雀踴躍し、鷄犬奔舞すれば、新春の氣、万戸千門に溢れ來る。人間乃はち之を正月と云ふ。

人、須からく仔細に此の機一轉の眞締を味はふべし。究つて亦た通じ、迫つて亦流るゝの際、陰陽更替の玄妙を觀る。万悶の鬱するは、一新の兆すに及かず。陽氣一と度び臨めば、百憂忽まち散じ、生面自から開く。新天新地の福音は、慈然として人をして成大ならしむるに非ずや。

左れば、憂ふるものは、其の憂ひに死するとなし、心貧しきが故に祝福あらん。究するものは、其の究するに終るとなし、心乏しきが故に幸福あらん。夕ぐれの寂しきに思ひ絶えんとするものは、あけぼのゝ樂しきを待て。一歳の薄運に怨みたらんものは、新らしき氣運の巡廻を信ぜよ。人世の常なきとは、悲憂の久しく續かざるを言ふなり。もし今ま榮華に安住せんものは、之を常なりとして戒しむべく、もし今ま悲しきに沈まんものは、之を常なりとして其の一轉を信ずべし。日光の照らす所に大道あり、厚地の載する所ろ明則あり、人安くんぞ其の憂悶を常久にすべけんや。

顧りみて明治二十七八年來の大勢を惟んみれば、醉ふて狂へるが如き時もありき、慢じて天狗の如くなれる時もありき、慘逆にして惡鬼外道の如くなれる時もありき、落心失望して痴人の氣抜けしたる如き時もありき。彼の時既でに一時ならば、此の時亦一時ならずとせんや。人間の驕るものゝ久しから

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず、悲しむものも亦久しからず。要する所ろ、其の本色を具存して、斷えず一個の大中心あらんとこそ願はしけれ。曩の悲哀するものは、豈に今ま猶豫せざるべけんや。

蓋し、失敗は經驗なり。少なくとも、近代の事歴に鑑がみたらんほどのものは、如今、當に嶄新一番の着目あるべき筈にあらずや。前悔を追ふは、舊功を誇ると同もに愚なり。今にしては既に一轉の機端に立てり、須からく猛然として一新の氣慨を振作すべき也。

年々の成長

◎古き諺に、三年立てば三ッとなると云ふ事あり。眞とに明白的確の事にて、何人も疑ふものあらず、亦た破ふものもあるまじき簡短極まる道理なるが、扨て之を實地に當て考ふるに、世上百人の中、九十九人迄で、よく審かに此の道理を體認するものはなし。不思議と云ふも愚かしきほど也。

◎先づ、先輩老輩などと云ふものの癖を言はば、彼の人等は、三年立たば三ッとなる進步を辨まへざるが如し。何日までもく赤子は赤子にて、殆んど成人せざるものと思ふにやあるらん、其の後輩を見るの眼識遂に誤まらずと云ふとなし。既に一個の赤子を見てすら誤解此の通りなれば、宏大なる時世の成長などを見とめ得る眼力の無きは當然なり。今の時世を依然として昔の時世の如くに見做し、毫しも機運の進步と云ふとに心づかず。甚しきは、吾が年少の時に榮えし商店を念ひ起し、其の頃ろに買ひし直段にて今も其物を買へるよふに思ふ老人すらあり。活潑々の時勢の成人するを覺り得ざるは當然ならずや。

◎之に反し、後輩後進などの癖と云ふは、三年立たざれば三ッとなり得ざるを辨まへざるにあり。急げば急にも出來るものと思ひ込み、晝夜兼行して無理無體に押し付け、夫にて成就せりと安心すれども、縫目の荒きものは綻ろび易く、俄かに附しものは離るるに早し。物の進步は生長なれば、一年に二歳を超さんとは出來がたきものなるに、其の情理を覺るはかたし。又、先輩老輩は兎角に因循くさく、其の言ふ所ろ一々愚に聞えて、大抵は之を馬鹿にするとなれども、凡そ人、大馬鹿にあらざる限り、年の功は龜の甲と同じく、蓄くなれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ば夫丈けの價は上るものと見做し、彼は三年立ちて三つとなりしものと勘定して尊敬すべき筈なるに、此邊の覺悟ある少年は少なし。

◎蓋し、成長は實地の經歷にて、夫丈けの年數、夫丈けの場面を履みて而して能く達し得るものゆへ、之を指先にて算へ、口先にて喃べり、單に理屈の上にて勘定したりとて、以て能く實際の成長を遂げたりとすべからず。宋人の苗を引く如く引張りたりとも、夫にて丈の伸るものにあらず、然らば何時迄でも子供たらんと押さへしとて鬚の生ゆるを如何んせんや。左れば、成長とは、自然の結果にて、人爲の及ばざる所ろなり。只だ及ぶ所ろは、成長に必要なる要素を取るにあり。食ひ、飲み、且つ勞働すれば、身體成長する如く、其の心も、事業も、何もかも皆な同類の要素を取るによりて、自然に成長す。之を取るは人爲なり、其の結果は天爲なり。此處の關係を能く分別して、怠たらず而も急がず、頼まず而も信じ、所云ゆる人事を悉くして天命を待つものこそ、眞とに其の道を得たるものと言ふとを得べけれ。

◎既に此の道を自得して、成長の何ものたるかを識認せば、

人の一生とは實にも幸樂極まるものとこそ思はるれ。人生、たゞ成長あるのみ、枯槁するとてはなし。枯槁は只だ人の物質となり木石となり瓦礫の如くとなれる時のみ之れあり。若し能く要素を吸入して自然の結果に一任せば、人は只だ成長するのみ、老衰はあらず。何をもて之を言ふとならば、彼の花の開落を見よ。花の未だ開かざるや、蕚之を被ふ。花の開くときや、蕚は衰ふ。花すでに艶にして色麗らかなるや、三日に過ぎず、忽まち落つ。而も其の落るは子實を結ばんが爲めならずや。左らば、之に衰ふるとあるは彼に榮えんが爲めにして亦これ成長の中の一段なるのみ。故に、男女二十にして身躰の發育休止せば、之に子女あり。子女あるを止めば、之に智慮あり。智慮あるを休めば之に靈覺あり。何んぞ之を成長にあらずとせん。人もし此の道によつて仔細に觀せば、人と邦家と人生と多くは成長あるのみ、枯槁は稀なり。枯槁は只だ其の私に拘泥して、自然の養素を吸はざる時にのみ之あるとを知らん也。

◎試ろみに、近年の我が國状に鑑んみよ。若し單に失敗の跡に悲哀して、其の垂訓に聽くとをせざれば、之れ私のみ。國

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

家の事業は、其の國民の聰慧と力量とを養ふをもて最大とし、國家の經濟は、其の人才を育し且つ用ゆるを以て大上とす。もし近年の失敗に數へられ、其の逆境にもまれ、爲めに玉成の偉人を産出せば、邦家豈に禍ならんや。凡そ、成長には波瀾あり、困苦あるとを知る。而して、其の逆境は遂に祝福にあらずと云ふとなし。故に、吾人は寧ろ近年の狀態に於て感謝する所ろあらんとするもの也。

◎夫れ、物は極度を思ふによつて覺悟を生ず。覺悟は膽力の根柢なり、氣力此の上に立つ。今夫れ逆境に臨まば其の困苦到底何ほどぞと思惟せよ。我に見榮を飾り、我に惰弱の氣存する限り、臆病の念兆さすべし。試みに大覺一番して其の極度を思へ。逆境の我を殺すものありや、飢餓の我に迫るものありや、劍戟の首べに臨むものありや、感じ來れば一笑に附すべく、顧つて思はゞ皆な我が垂訓にあらずや。斯の如きは皆な我が成長の材料にして、我之によつて成長すと覺らんとき、人、夫れ何の故にか落心氣喪するぞ。

◎今ま新年に入つて、一歳の成長を遂げ得たるを感謝す。年々斯の如し、何んぞ人生に感謝せざるを得んや。抑そも知る、人間の至樂は、未だ知らざりしとを知り、未だ覺らざりしとを覺り、未だ自得せざりしとを自得し、漸次に吾が靈臺に蓄積して、三年即はち三齡を加へつつ行吟するの快味、實に言ひがたきの所に存するとを。人もし此の寶脉に觸れて、此の琴源に聽かば、夫れ何んぞ欣舞雀躍せざるを得ん。

田家煙

湯谷礎一郎

豐なる御代のすかたを先つ見せて
さとのけふりのなひく今朝かな

元日大内山を遙すがら仰き奉りて

大君の千代田の宮はうら〳〵と
はるをも待たて霞みけるかな

同じ日巷にてよめる

ものゝふの黄金のもうるきらめかし
いて立つさまの勇ましきかな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

二十世紀前一年の新年觀

無談庵

◎明治三十二年、噫是れ十九世紀末後の一年にして、二十世紀將來の一年前に屬す。一世紀百年間の世界史は、將さに今年を以て結末を告んとするなり。十二月と云へば一年の末月にして世俗の多忙を極むる時、特に末月末日の除夜は將さに舊を送り新を迎えんとする刹那にして、各人の回顧反省を試み、感多少の湧出する機とす。而して今年は一世紀の末年に當り、恰も一年間の十二月に均し、此際、世界の舞臺に現はるゝものは何か、世界は如何の回顧反省を試みんとするか、二十世紀の新年を迎ふるに如何の準備か爲さるゝぞ。

◎今十九世紀は、歐洲に於ては、佛國の革命を以て始まり、戰亂年として絕えずと雖も、今世紀に於ける人文を大觀し來れば文明の開進驚くべく、學術技藝の發明進步より世界の交通密接せる眞個に祝すべきもの多々、今一々之を回顧して敍述するの遑を有せずと雖も、其重要なるものを擧ぐれば、西洋文明、寧ろ西力の東漸せる、英國植民地の擴張せる、露國所領の膨脹したる、東洋問題の解釋に近きたる、各國軍備擴張に力むる、人種排斥の聲絕たさる、近くは獨の徵公、英の具公の沒せる又英は威海衛に、獨は膠州灣に、露は旅順口に、各割據し、又米の非立賓に於ける等、若し今世紀に於ける歐洲諸國の東漸進步したる形蹟を擧げ來らば、實に驚くべきものありて存す、十九世紀は眞に西力東漸の時代と云ふべし。

◎二十世紀一年前なる今年に於て、外交界夫れ何等の波瀾あらんとする、三月頃露都に於ては萬國平和會議開かるべし、然れども東洋諸國にして今日の如く微弱なる以上、西力東漸の趨勢は尙ほ經濟と軍事との二者を以てすべく、戰爭未だ容易に止むべしとも思はれず、旅順にある露人、威海衛にある英人、膠州灣にある獨人は、此新年を迎ふるに如何の容貌を爲しつゝあるか、余の見聞したきは正に是れなり。

◎非立賓の叛徒、其心事憐れむ可哉、甞には西班牙に虐待せられ、今は米人の所領となる、異教國を以ての故に、只管外邦

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の侵略に從事する彼れ歐米諸國、常に人道を主張する彼等國民の暴戾は、十九世紀に於て顯著なる事實たり、非立賓の叛徒は飽迄も抵抗して止まざるべしと云へば、米人も少なからず、手を燒くとならん、吾人は非立賓人に同情して止む能はず、嗚、振つて彼軍に投じ、獨立を扶助せんとするの有志なきか米國の厭き、米西事件の眞相を看破して、之を所領するの非道なるを唱道する人士なきか、非立賓獨立黨の人士が、果して如何なる感慨を以て、此新年を迎えたる、聞かまほしきは、即ち是れなり。

◎二十世紀一年前の日本は、何等の反省を以て舊を送り、何等の希望を以て新を迎えたるか、其一斉に叫ぶ所を聞け、曰く不振不景、曰く腐敗亂雜、曰く無事寂寥など。然り政界の腐敗地に陥ち去りて政黨の去就は昨東今西、議會の無能は益々人心に飽き渡れり、財政は困難にして外交は凡て人後に落ち、文界教界共に寂寥を極め、又言ふに足るものなし、過去一年の如く余輩をして不快を覺えしめたる年あるを見ず、之を世界の舞臺に見るも弱肉強食、西力東漸の事實あるのみ、吾人此新年に於て悲觀せざらんと欲するも得ざるなり。

◎さらば如何の希望を以て新年を迎え、如何の準備を爲して二十世紀の舞臺に立たんとする、屠蘇に醉ふものも、羽子つくものも、今年は例年に比して少なき樣なり、地租増徴の結果、將來を氣付かうか爲めか、農家も太平樂を歌ふもの少なき樣なり、地代を增加し、小作料を引上くるの聲、獨り早く聞ゆるは何の兆ぞ、寒地にありて勞作するもの濁酒一杯を傾く、無上の樂み也、今や自家用料酒を禁止せられて、アルコール多量の混成酒、サルチル散、グリスリン其他種々の藥品を混合したる惡毒酒を以て其健康を害せざるを得ざるに在れり、國民何を以て新年を喜び迎ふるを得る。

◎國家を構成して其の國民たる以上、之を發達せしめ之を成長せしむるが爲めに、其要する所を出すは國民の義務たる、我れ之を知る、然れども國家の名に於て罪惡を行ふものに對つて之を補助するは、之れ國賊なり。近來の事、皆な國家の美名下に行はる、國民を苦めんとせば、先づ國事に從ふもの苦まさるべからず、何事ぞ、奢侈に耽り、蓄財を事とし、大臣たり、役人たるを以て富豪の位地に上り、自ら反省する所なく勤儉する所なく、慈悲する事なくして只管下民を苦めそが

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

膏血を絞らんとするは。國家の名に於て、自家を肥さんとするの政治家あるは、國民の不幸にして又耻辱たり、軍備の擴張と云ひ、諸官省の建築費と云ひ、悉く虚飾を事とするものにして以て國家の盛大を期するを名とす、近來の事大概如斯、嗚呼、國家の名なかりせば、人類は如何に幸福なりしぞ、此の如き機期に際する新年、誰か之を喜び迎ふるぞ。

◎税金ばかり高くなりて、何も面白き事なしとは、各地共に響く所の聲ならずや、僞政治家云く、國家多事費用多し、之を國民に徵するは當然なりと、而して彼等自身は愈々益々富豪となり、奢侈に耽りて止まず、曲學阿世家は云く、國民の義務は國家構成の要素となり、之を成長するに犧牲たるにありと。而して學說を曲げ世に阿り、政治家をして愈々墮落せしむ、獨り下民、警察權の下に立ち、執達吏の下に立つ。以て黨派の掛引、自家の立身、虚榮に奔走する爲めに、多數決を以て斷じたる凡ての者を負擔せさるべからず、則ち少數の野心家が利己問題を以て决議したる所に從ふの止むを得さるものあり、斯の如き政治下にあるもの、如何ぞ、新年を喜び迎ふるとを得る。

◎西力の東漸は、其止まる所を知らず、而して海外の貿易に從事するもの少く、唯內地にありて少額の輸贏を爭ふ、故に財政は益々困難して其際を知らず、財政困難の最大原因は、海外貿易の不振と軍備擴張とにあり、而かも何人も之を振起し彼を縮少せしむるの力なし、隣國の大淸の志士は、大に日本の振起を待ち、日本起たずんば東洋を如何せんと叫ぶ、然るに、蓄財を事とする大臣小吏、子孫の爲めに美田をのみ求めんとする守錢奴の群居せる我社會は、ラヒットが米國の革命に助力したる如く、非立賓の爲めに一臂の力を添えんとするもの一人だも出でず、漸くにして所領せる臺灣には、公娼設置を斷行したれども、其失政や擧げて數ふべからず、朝鮮の事は已に國民の忘却せる所、惟ふに今日の政治家、議會、學者等、悉く之を放棄し去り、新規の組織を爲さずんば、到底新年を迎ふるに滿腹の情を以てすべからず。

◎二十世紀に入る準備は何か、云く、精神上に大革命を起すとなり、個々人々、偉大の信念を有し、精神的革命を起さゝるべからず、此革命の洗禮に沐浴したるものは、即ち二十世紀の新要素たらん。何物か、其準備なる、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

其一は、政界特に議會の爲すなきを睨し、政客を輕視するとなり、其二は社會平均の發達を期し各社會平分の榮譽を荷ふの機會を發揮するとなり、其三は小島國に蟠屈せず盛んに海外の貿易に從ふの心事を惹起するとなり、其四は國民皆兵の組織となし十二師團を全廢して、各町村に練習所を設け士官をして之に當らしめ、商船を増造し海軍擴張の必要を悟らしむるとなり、其五は華族を全廢し財產世襲の如き直ちに皆無とするとなり、其六は財政上の事に於て、高利貸の貸賃料、各種の所得稅、土地家屋の貸賃料、家督相續稅等に高稅を附し、更らに救貧稅を起して他方には、小作人保護、勞働者保險法を執行すべし、其六は諸官省の如き凡て宏壯の建築を排し、大臣、高等官等を名譽職とし、併せて議員の歳費を半減するとなり、其七は、個人、平等、自由の主義を盛んに信仰して、僞愛國、僞忠君の奴輩を「リンチ」法を以て制裁するとなり

若し、是等の二三にして實行するとを得ば、二十世紀の新年を迎ひて、世界の外交界に立つ、敢て可ならずとせず、希くは二十世紀前一年の今年に於て、極端的の狂熱家を起さん哉。

◎二十世紀一年前の日本は、政界の腐敗、德義の廢頹、人文の不振を叫びたり、されば此禍を轉じて福となし、以て新世紀の舞臺に雄飛するの熱誠なかるべからず、內にありては至能の人、政事に與かる最先の要あり。至能の人、上に立たずんば、憲法、法律、議會、金錢、何事をか爲し得る、然れども吾人は人を責め人に賴り人を苦めんとを欲するものに非ず廣く知識を世界に求め、悠然として迫らず、天下の大道を學び、天地の眞理を攻究し、人情の赴く所を察し、大に新世紀に於て活動せんとを期せざるべからず、世豈に正義の士なからんや。亂離來れ、苦難來れ、唯其極端に走れよ。

回首すれば、國運の前途、決して失望するに及ばず、屑々の小人、其爲す所に任かせて可なり、獨り靜かに養ひ、至誠以て國事に從ふものを望むの時機、將さに來らんとす、新世紀に入る一年前の新年、世人聊か整理する所ありて可なり。若し夫れ十九世紀文明の性質と、來世紀に起るべき問題の如き、他日を期して詳論せん。

雲照律師曰く、増稅案の通過難きを憂ふるは自ら決せざれば也、ワシ等は日に豆腐一丁あれば生計には困らぬ。もし今の侯爵等が自から抑損して、先づ投げ出す底存ならば、何ぞ國家切用の收入を得ざるを憂へん。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭

心の規律

規律とはキマリなり、キマリとは物の區限りを云ふ。物に區限りなければ茫漠として取留めなく、進退、増減を識らず。事自づから亂雜にして不取締とならざるを得ず。人生の健全なる暮し向に第一の禁物とする所ろ也。

苟そめにも事を成就するものは、工夫と、勉强と、辛棒とを要するとは勿論なれども、若し、秩序を失して、不取締に流れ、物の〆くゝりと云ふとに手落あるときは、今日一時の成功も、明日は空しく消え失せて、何の詮もある可らず。此の事に尤とも必要なるは即はち規律なり。

規律なければ、騷々しく、騷ぎ多くして功少なし。二重手間を重ねて、徒勞に屬するとの多ければなり。規律なければ、費えを増す、要らざる所ろに消費して、要る所ろに不足し、出費多きが上に、不便も亦た多し。尙且つ、規律なければ、人の行狀を亂し、肅しみを破り、我儘の増長に加勢す、不貞不德之より由來す。

左れば、一家の整理に大切なる第一の要道は、家庭の規律これ也。この規律より家風を生じ、此の家風より万事を生せざれば、家庭の基礎堅しと言ふべからず。

こゝをもて、新たに家を起すものは、其の創業に此の規律を立つ、所云ゆる家憲これ也。既に家を有するものは、年頭に此規律を壯嚴にす、其の感化を鮮やかにする所以なり。舊家、新家同もに皆な此の心掛ありて、家の規律を嚴そかにせざるものは、其家斷じて久しからず、たとひ久しくとも廢れたるに均し。何の價値あらんや。

但だ夫れ、規律を嚴そかにするにつけて最初に忘るまじきは規律の精神これ也。法もと死物、人ありて能く之を活かす。規律必竟亦た繩の如し、之をして能く生命あらしむるものは、有力なる人心其の根抵より徹して優に之が精神となるものあるの故なり。若し、規律を規律として働らかしむれば、人忽まち反動すべし、人は繩よりも鈐ときものなるが故なり。規律の能く規律となりて行はるるものは、之に生命あるが故

なり。生命とは偉大の人心を言ふ。人心活動して、規律の姿に凝り、其首尾に貫通して人に臨む。人は靈悟に敏にして、勝敗を未だ戰かはざるに決するものなれ、もし吾が靈の心服するに足るべき偉大なる人心の活動しつゝある時は、頑骨直ちに解け、自負の氣忽まち挫け、貞然として、悦服す。則わち甘んじて館長の規律に隨がふの所以なり。

左れば、規律の能く行はるゝものは、其の精神たる人心の能く行はるゝに由る。人心の行はるゝ限りに於て、其規律行はれ、其の威德の届かざる所に於て、其の規律は徒法となる。たとひ、嚴重精密の規律を可として之を施かんとするも、能く之を活動せしむるに足るべき人心のなかつせば、何の功あらんや。人は只だ其の智德と修養との度合ひ次第にて、他に及ぼすの化力に大小あり。而して、此の化力次第にて規律を活動せしむるに大小厚薄あるとを知らば、何んぞ徒らに古人先人に倣つて妄りに規律を造らん。たゞ吾が力量に相應なる手ごろの規律に對してのみ能く感慨あらんとする耳。

故に、發表せられたる形式上の規律は、其の根抵を無形の人心に於て基ひす。顯はれたる規律は、心の規律の影なり。心先づ規律に適はざれば、心外の事物を之に從がへんとは難し。

一〇

我心先づ我心外の事物を從がはするを得たらん後にあらずば、人をして其の心外の事物を從がはしむるほどに有力ならじ。之を詮ずる時は、我が心外亦た何の別法かあらん。年頭に臨んで、舊年を顧りみ、あらゆる不規律の弊害を自覺して、將に一新の工夫あらんとせば、先づ須からく自己心中の心の規律を振作すべし。心規正しく律法に適し、衷心の規律秩然として立たば、大本固く立ちて小枝從べて宜しきが如し。他のあらゆる末事に何の憾みかあらん。

躰の規律

古人の戒しめに手習ひは坂に車を推す如しと敎えたるが手習ひよりも何ほ早く元に返り易きは躰の躾なり昔し葛天氏の民の如く裸跣裸足のまゝにて不都合なき時勢には格別ながら人間美と云ふとに練熟して身躰の上に之を飾り以て躾と云ふものを盛んにしてよりは八府九躰に施こすべき敎訓さまゞゝあり皆な其の天然の野蠻を矯めて之が美を開發するの方にて總

べて新習慣を附加するにあらざるはなし然るに其のつけたる癖の中善き癖は忽まち失せ易く悪き癖は去りがたし悪き癖とは身の樂に出來るものにて善き癖とは勉强して初めて身に着くものゆへ斯く速かに忘れ易きものなるべし一例を此頃の寒中の所作に取らんに毎朝起き出でて冷水にて身躰を拭くは万病を除く至極の妙法にて人もし此の良習慣を續くるときは虚弱のものも久しからずして堅硬となり風を引き易きものも至つて丈夫のものとなるに疑がいなきことなれども扨て寒風砭の如く膚を刺す冬のあした〳〵怠惰なく之を實行すとは中々〳〵の事なり男子は更に奮發して冷水浴を爲す即はち全身に冷水を打かくるか又は冷水の中に浴するなり之を拭ふに比べては一層の利益にて又一層の困苦なるが若し日々此の習慣をつけ決して間斷なく行へば先々續くるとも出來れど若し一日にても二日にても中止すれば忽まち本來のブショウ癖出でて其の翌る日は之を續けんと非常の苦しみとなるべし乃はち良き癖の速やかに失せ易き證據なり試みに見よ顔に衣物を着せるものはなけれど人は其の寒さを歎ずるとなし顔も膚も同じ皮の厚さにて血の通ひに相違なく人間の神經に文野なき筈なれども一は生れ乍らの習慣にて遂に寒さを覺へざるなり然るに西洋婦人の如く其の面にベールと云ふを被ふ癖をつければ忽まち之に慣れ最早寒風ある冬の日に素面にては外出の出來ぬようになる者もあると云へり足にても手にても亦斯の如し吾等の少き頃は男子が足袋を穿けばおめかしと言はれて笑われたり其頃は寒中裸足にて寒しとは言はざりき手は無論の事なり然るに今まもし一と度び手袋を用ゆれば其の翌日は亦た廢めがたきに至るべし人の良き癖の失せ易く悪き癖の慣れ易きは斯の如し左れば餘り文明々々と呼びて身躰に樂をすれば良習慣大に減じて身躰ことの外弱くなるべし身躰の弱くなるが決して文明の想想にあらざるべし成るべく身に樂をせぬ工夫をして追々と躰を練り上げ寒風熱砂にも痛まぬ良習慣をつけて眞乎の開化をつくるべし若しよわ〳〵しき華族の子を開化せりと言はずば人の軟弱になれるを文明と云ふの理もあるまじ良き癖は附け難く油斷すれば一日にて消失すと心得て至つて之を珍重し決して身の樂と惰弱と横着とを貪ぼる可らず昔しは寒ゲイコと云ふとありき甚はだ善き工夫なり人々元氣を振ひ起して各々其の身躰を練るべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎伊藤圭介翁の家訓

理學博士伊藤圭介翁は我邦植物學の泰斗なるとは今更いふを待たず。翁今年九十七歳、子孫皆世に名あり。翁子孫の爲に「家訓」を殘す。これ翁が八十三歳の元旦筆を揮ひて、廿九年三十年三十一年の三元旦に復閲增補したるものにして、一冊の書「禁出門外」の朱印を捺し、訂正の箇處また一々印章を押すといふ。其家訓に曰く、

神を敬し
上を尊み
御布告を守り
親に孝行く
主人に忠義正直、師恩を忘れず
人に交るには信實溫和にして過言を云はず
早く起て職業を出精し
家内睦まじく耐忍慈悲を專らとし
大酒大食を戒しめ
倹約養生して身体を强壯ならしめ家の繁榮を望むべし
此戒を毎朝一度宛唱ふべし、是我家の遺訓にして生涯の精神也

史傳

基督降誕の夜の景色

（卅一年十二月廿六日夜談話筆記）

◎今を距る壹千九百一年前の當月昨夜、ユダヤの國ベツレヘムの客舍に耶蘇基督は生れ玉へり。玆に當夜の光景を想像し顯彰して、此の一大祝福の感謝を新たにせん。

◎佛蘭西のギゾウが文明史に、全篇の骨子となれる一理論あり。曰く、人は其の心中に起れる新思想を是非とも如何にかして發表せざれば休まず、之れ世界文明の進歩の泉源なりと。嗚呼、人は思ふとありて言はざるはなし、得たるとありて顯はさゞるはなし。況んや、其の慈心悲心の動く所ろは、身を粉にし、骨を砕くとも猶は現わさゞれば止めず。馬となり、犬となりて、若兒の前に狂舞する親の心は、たゞ其の思情を見めさんとてなり。此の情、愛子に通じ、愛子、呂律を稍やうに調のへて、仰ぎ見て初めて、父よ母よと言ひけん時の

喜悦は如何にぞや。親が其子に示めしたきもの數多くあり。家重代の寳、祖先一統の系圖、勳功恩賞の目錄、世襲家產の有高など皆な其の子に示めして子に悅こばせたしと思ふべけんが、就中、胸を割さばき、腹を裁擴げて迄で十分に見せたしと思ふは、吾心中、吾思想、吾持論、吾特色、ことに尤とも吾が慈愛の程なり。夫れ、人間まざりある親心の慈愛すら既に斯の如し。無邊無限、大慈大悲の天父、一切衆生の吾子を覽そなわすの時、それ如何んぞ其の御心、御思、御姿を顯現せばやと思し召さゝるべき。森羅万象も、其の現はれの一つなり、歷世の事實も其現わしの一つなり、百花千鳥も亦た其の御使ひの一つなり。左れど尤とも切に、又尤とも親しく、其の御德を顯照し、以て痴純極まりなく頑是此上なき吾等人子に御姿を示めし、玉わんとで、固より更に特種の天啓あらんとはすらん。斯て耶蘇基督は降誕し玉へり。

◎世界は比隣の如し、大勢は湖の滿ち亦た干くに似たり。孟子所云ゆる一治一亂は、小は家國より大は全天下に至る迄で、同もに其の運化あらずと云ふとなし。今より一千九百年前の頃ほひ、羅馬の威權全地に輝やき乍ら、靈德高尙の氣風は地を拂つて失せ、人々華美肉慾に流れて、世は文明と云ふ野蠻極まる醜態に陷いりたり。左れど、洪水の時も最も高き喬木一つ二つの梢は水面に露わるる如く、各國に聖者一人二人は必らずや存す。四面の楚歌に心をいため、流るる濁波に思を離まして、獨り高天大神に祈願をこめ、神聖の代挽回せざる可らず、理想の人出でざる可らずと熱望すらん。彼等互ひに國と所とを異にすとも、其の志願は一なり。同もに思を天に馳せて、望を神壇に鳩む。喩へば、大なる傘の骨の四方より高き一點に集まるが如し、而して其の同もに待つ所ろは、天より慈雨の降らんと也。時に、希臘にカスパーあり。天竺にメルキラルあり。埃及にバルスアサーあり。皆これ舊國文化の地、世界に曙光を放ちたるの國なり。先哲一々天啓に聞きて、敦く神靈の獨一を信じ、固く人の靈性の不朽を認めしに、正信時と亡び、邪悅外道横行し、天變地妖止むとなし。正に是れ一大救主世に降臨して、濟生撫民の慈愛なくんばある可らざるの時と。彼等靈姿に深く、感應に精しきを以て、夢寐彷彿の間に默示を蒙り、覺めて信じ、眠りて聞き、遂に一大明星の天上と胸頭とに輝き、木枯のさゝやく如く、波音

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の轟ろく如く、間斷なく吾靈耳にひゞきて、行けよ〳〵と命ぜらるゝとの只事ならず感激せられ、彼等三聖、同時に異鄕を出發して、アラビア砂漠中に一夜邂逅せり。流星、天幕の上に停まり、駱駝、幕の外に平伏す。三聖各々志を述べて符節の合するに讃歎し、之より相伴ふて、神子降誕の地を蒞めんとす。即はちこれ一千九百一年前の當月下旬の事なり。

◎翻つて觀ず。ユダヤの古都、エルサレムの殿堂は、喩へば、神洲に於ける伊勢の大廟の如し。國民皆な大廟の都度に參詣し往來の人引も切らず。况んや是れ羅馬政府、天下に布告して、大いに戸籍調べを爲さんとするの時なりければ、其の寄留の地を去つて原籍の地に還らんとするもの、一と度びはエルサレムに參詣する者太はだ多かりき。

◎エルサレム城郭の西方に門あり、ヲコツパの門と云ふ、又ベツレヘムの門とも云ふ、ベツレヘムに行くの途なれば也。門に對して數條の路集まり、集まる處ろ街上廣く、茲に佇々の小さき露店あり。皆な巡禮參詣の旅客に物賣る商人なり。商賣するもの、麪を賣るもの、針、ピストル、駱駝、瓜、天幕、驢、小驢、騾、奴隷の賤、細工混淆して列んだり。日出原朝の頃より、喧々として騷がしく、靈の爲の商業ながら、流石に俗氣紛々たり。

◎往くもの、來るもの、算すべからず。人肩相摩し、駱駝相ひ鳴くの混雜中に、一キワ目立つ男女二人の參詣者は何ものぞ。小さき馬に乙女と見ゆる婦人を乘せ、馬に傍ふて緩かにジョッパの門より出で來るものは、年の頃ろ、五十路を越せしなるべし。丈高く、頑丈にして、足の歩み、太く且つ重々しく、急がずして而も應揚なり。手に持てる杖は鞭にも代用せらるべし。ユダヤ風の長くして質素なる新らしき上衣を被ひ、黑き髯房やかに胸に垂れたり。眼光沈重にして、言語太く、總べて質素にして輕浮の氣毫しだになし。若し其の田舍人の間だに擧名せられば、當に正直者の某と呼ばるべき人なり。此の人、馬の首を導びき乍ら、數たゝび馬上の婦人を見て保護の情禁ぜざるもの丶如し。馬上の人は、年齒稍やう十五歲ならめ、純潔なる乙女まさに貞淑婦人たらんずる過渡の年なり。騷々しき周圍の俗界をそと窺み見て耐へざるもの丶如く、仰いで天上を眺めつゝ、青空に鳩の飛び上る尊とげの様を羨やむらし。時に其の純白の徵衣の下にほの見えたる姿を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

瞥見するに、顔丸るく、色白く、鼻整美にして、唇頬と調へり、其口元に優しさと、信實の情こもれり、眼は大きくして青く澄み、睫垂れ、目毛長く、自づから慈愛の相顯わる。黄金の髮の毛背より長く垂れて踝に届き、頸も胸も軟らかく豐かにして、赤兒の玉を抱くが如し。惣じて、純潔の氣何處となく充満し、高美神聖の相姿を呈せり。

◎即はち是れ、ヨセフと其妻マリアの風采なり。マリアは姉一人ありて、父母なし。家産を嗣ぐの國風に隨がひ、叔父、ヨセフと婚約成る。其系統は、英王ダビデの後にして、ユダヤ國の名族たり。この二人もとベツレヘムに生れしが、久しくナザレ村に寄留せり。今まや其の原籍の地に行きて戸籍調べを受けんとて、ジヨツパの門を出でゝベツレヘムの街道をゆく也。エルサレムを距ると凡そ八マイル。繩手道を通り、丘を登り、池を廻り、田圃を過ぐ。正直なるヨセフは、折々勞はりて獨り語し、又樂しげに默想して濶歩大足す。馬上の人は常に深沈として冥目し、時々、空氣清朗の野景を眺むるあるのみ。

◎緩やかに三四里の路を行きて、夕方早くベツレヘムに着すれば、街上、客充満して市の如し。近づきて聞けば、宿せんとするもの甚はだ多くして、客舍に餘室なきの故とぞ。ベツレヘムは二三千戸の小都會ながら、客舍と云ふは唯一つあるのみ。當年之を館と名く。廣ろき廓内に房室數多あれど、皆客其頃の習はしに隨がひ、食料寢具は泊まる人の自から辨ずるに任す。館の主人は、門に倚り、又は門上の床に立ちて、出入の警戒を爲すのみ。然るに此の館すら今は客充満して、明間なしとぞ。門前に數多の客群集して、雜談囂々たり。然れど、ヨセフは、只其まゝに止むべき人ならず、自から人の爲に及ぶべき限りを盡すをもて、人も亦た其の及ぶべき限りを盡すと信ず。只だ傳聞するのみにて止まず、一と通りにて休めざる彼の正直は、館の入口に來つて館主に再三委賴したり。吾は能く忍ぶべし、吾妻年少にして且つ懷胎せり。十二月の寒風と夜露とに曝されて、館外に徹くよを得んやと。館主は其の無邪氣にして誠實なる強き委賴に動かされ、然らば如何にか都合し參らせん、來り玉へと云ふに、門を入りて其后へより行けば、果して館内は充ち滿ちたり。門より石の小路を通り、左右に數多ある室の間を過れば、駱駝が双方より

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

首を出すに觸れ、荷物の山の如く積まれしにも遮ぎらるゝと屢ばなりき。更に往きて一郭より外れ、更に行きて館の后方の小暗き所に達すれば、玆に疊二十ひら計りの廣さある空厰めきたる者あり、其入口に少し計り材木にて繕らふ。これ曩に、馬小屋にせし所と云ふなり。内に積みかさねたる草もあり、塵芥も亦た多かれど、館外に露泊するには優れり。左れど、マリアは心に念ずらく、昔し英王ダビデの羊を飼ひ馬を畜ひ玉ふころ、此の館に宿泊せられき、其の馬は果して此處にや容れられしか、ダビデ王の此のほとりに枕し玉いしとのあるべしなど、坐ろに懐舊の情にむせびて、ゆかしさ禁じがたく、莞爾として此の假りの宿りを謝せられしが、誰か知らん、此夜は即はち當年の昨夜（廿五夜）にして、此の夜々半、主基督の降誕し玉はんとは。

◎日暮るゝ比になれば、全館暫らく寂として聲なし。これ皆な日暮の祈禱を爲すなりけり。暫らくして、雜々として響きあり、喧々として聲わん、皆な夜食に就くなりけり。而して後ち、皆な旅の勞れに早やくまどろみ、半夜少こしく目覺むるの比、一天俄かに燦然として光る。只見る、南東に當つて一面の光あり。熟視すれば、天上の一大星いよ〳〵近く、之より光帶を發す、光帶地に下るほど推ひろがり、電の如く、紅の如く、輝ぐ如く、照る如し。館内の人皆な愕然として、驚ろき、暗中互ひに照されて明に顔を見、蒼然として恐る。時に館后に呱々の聲を聞く、又た讃美の歌をきく。

◎ベツレヘムの南み東の方、一二マイルに廣野あり。玆に大なる牧場あり、羊かひ等同もに羊を畜ふ。東南に開けて日當りよく、西北に山ありて、山下に羊の柵をつくる。柵は、四方に嚴めしき塀を構へ、塀の下に密なる生垣を植え、獅子、狼も伺ひ侵しがたくす。柵に出入の門一つあり、門に傍ふて羊飼ひ夜中、火を燃やして警戒す。彼等が羊を愛するは子にも優れり、羊の彼等に懐くや、親にも優れり。羊はよく其主人の聲を知る。夜間、主人門外に番すれば、羊はよく群がりて安眠す、何んぞ其の可憐なるや。此夜六人の羊飼ひ例の如く門前に露營し、かはる〳〵寢ねて曉に達す。夜半、露重く、風寒し、篝火も亦た眠たげなる時、一人の番者、大なる靴を穿ち、皮裘に身をまとひ、肩よりラツパを下げ、手に鞭杖を提さげ、彼方此方を見廻るとき、只だ靴の音のみ高く、萬籟閴た

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

り。時に、大星天より落る如く、全地一面に光り、電光の白晝俄然八方より降れり。彼は絶叫せり。犬も絶叫せり。他の五人はハツヤと飛び起きて武具を握り、獅子、狼や來れるぞと凝視せり。聖書此時の光景を叙して曰く、

近傍に羊を牧ふの者けるが野に居て夜間その群を守たりしに主の天使きたりて主の榮光かれらを環照ければ牧者おほひに懼たり天使これに曰けるは懼ること勿れわれ萬民に關りたる大なる喜の音を汝等に告べしそれ今日ダビデの邑に於て爾曹の爲めに救主うまれ給へり是主たるキリストなり汝等布にて裏し嬰兒の槽に臥たるを見ん是その徵なり倐ち衆の天軍あらわれ天使と共に神を讃美て曰けるは天上とこ ろには榮光神にあれ地には平安人には恩澤あれ天使等かれらを離て天に行ければ羊を牧ものの互に曰けるは卒ベツレヘムにゆき主の示し給へる其有し事を見んとて急ぎ至マリアとヨセフまた槽に臥たる嬰兒に尋遇り既に見て此子につき天使の語し事を傳播ければ聞者みな羊を牧者の語る事を奇みたり羊牧者その見聞せる所みな己に語し所の如なるによる神を崇かつ贊美て返れり。

◎夫れ羊飼ひは、人の尤とも正直なるもの也、就中、信仰敦朴にして古代の敬仰を失はず今ま彼等先づ此の福音を聞きて、恐喜止まず、相叫んで曰く、イザヤ吾等ベツレヘムに行かんと。一人曰く、吾等の羊を如何んせんと。皆曰く、主よく護り玉はん、何の憂えかあらんと。彼等初めて、羊を遺し、相走つて、ベツレヘムに至り、馬槽ある家は只だ彼の館のみと知れば、直ちに趨つて館に達す。

◎後るゝ十一日、彼の三聖は、白き駱駝に跨がり、銀の鈴を鳴らし、吾主降誕の地何所ぞと尋ね來る。

◎嗚呼、耶蘇基督は、人の尤とも聖仙なるものと、人の尤とも朴質なるものとに先づ知られて、家の尤とも由緒ある館に於て、其の尤とも貧しき室に生る。夫れ偉靈の降誕は皆な乙女の胎に宿る。古人皆な其の人の子なることを信ずる能はず。日輪の胎に入る、大人の足跡を蹈む、皆な此の類なり。凡そ世に於て尤とも純潔なるは、純潔なる處女の腹に於て、偉靈に感應して降誕するに及ふものあらじ。もし耶蘇基督に於て此の傳説なくば吾等は新たに此の理想を立てん。而も之れ用なし、耶蘇は實に乙女マリアによつて生れ玉ひし也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

救主降誕祭祝文

馬陵生

惟ふに一國社會が腐敗亂離の狀態より脫出して、革命新進の氣運に臨はんとする、罪悪醜陋の人生より救拯せられて、獻身高貴の新生涯に入らんとする、之れ恰も陰暗鬱陶の天地が、紅霞揺曳將に光明赫灼の天地に轉移せんとする、一瞬時の光景の如きか。

見よ天際に明けんとして未だ明けず、惟見る東天一顆の星、獨り燦として輝けり。水村山郭何事ぞ、寂寞蕭條たる茅屋の裡、嗚呼救主よ、慈悲無限の愛撫懷抱の下、彼が明瞭、始めて彼女の膝上に臨降なり。朴質なる牧者は、爲に手を合せ、敬虔なる學者亦來りて貴寶の贈物を獻けたるにあらずや。嗚呼人生變の福音、已に萌芽を發展せり。

冬林蕭條の天地、早く已に春陽融々の佳氣を諧む。彼が遠祖、已に今日を預言し、彼が祖國の史跡亦皆彼が今日を中心として編せらる。至小のベツレヘム、永く至大の光榮を荷ふ。讚むべきかな、世の罪を負ふ神の羔、尊きもの賤められ、輕きもの重んぜらる。嗚呼人生史の回轉機、人生の眞意義、縮寫せられて此處に在り。

哀れ信なく義なく、侮慢虛飾の卑風、上下を覆ひ、三千の子弟恭敬謹肅以て孔聖に師事するの美風、地を掃ひ、學者其理を曲げ、治者其政を私にす。嗚呼之れ降誕前後、彼が祖國の狀態にあらざるか。僞善横行、白く塗りたる墓よ。亞國破れて山河在り、人罪悪の淵に沈んで、光明を厭ひ、時已に至りて復た更に疑ふ。

夫れ邦家の存立、人生の意義豈に偶然突如ならんや。人侮慢頽廢の汚風に泥んで、擧國徒らに物質の昌榮を追ふ。嗚呼之れ何れの國の將來ぞや。今時翻然として覺醒し、深く國性上の榮辱進退に省みる所あらずんば、人間の性格忽焉墮落し、風俗爲に汚れ、哀むべし國家組織の基礎、一朝瓦解せん。嗚呼危機一髮、正に是れ風前の燈し。

顧ふに、東洋の一孤島、海端國有り名は扶桑、俗與、風光、皆猶懷さは、我等の常に矜誇する處、是れこの花彭島、秀靈英雄の鍾まる處、明媚丘水の湛ふ處、江山の美宛から自然の聖殿たり。可之れ大和民族の國する處、我等祖國的愛情の

繋る處に非ずや。見よ東方已に白く、一道の曙光、靉靆たるもの、其れ今の時にあらずや。我等速に人類大道の活ける模範に聖化せられ、直に愛の福音に光被せられずんば夫れ將た何れの時をか待たん。

文藝

藝、神に入る

鷗村

藝、神に入つて、始めて藝の妙あり。凡そ藝に達するものは、必ずや不言不傳の神妙を語る。

昔元祿時代に松山侯松平定直の家臣にて、宇高喜太夫とて亂舞に精妙を得たる人ありけり。曾て宮島にて一時修せし時、舞臺の太夫柱、修覆の時、大工誤つて大形に造りしかば、喜太夫は舞を奏でながら、思はず知らず、其柱を蹴欠きたり。是れ定寸に違ふが故なりしとぞ。其後此柱を稱して、喜太夫柱と稱せり。また或時鉢木を舞ひしに、頃は六月の空、大地も燒くが如きに、喜太夫の常世が、嗚呼降つたる哉と謠ひしや、忽ち其邊雪花紛々として降りけるとぞ。其後此人老衰の餘狂亂となりしに、發瘋の時、狂ひものを思ふ頃は、狂氣甚だしく、又修羅の苦しみを思ふ時は、食中、箸を以て修羅の狀を試み、而して鬘事を思ふ日は、至つて靜穩なりしと。喜太夫藝に純一なるに非ずんば、焉ぞよく此事あるを得んや。

之に似かよひたる話あり、近日の時事新報に尾上菊五郎藝談とて梅幸自ら語りて云へる中に、

梅壽（祖父なり。）は女形の時に、失策る人を連れて行つて詫るぞ、和かに返事して詫びが濟むが、勇みの役の時にはべランメイで惡口を吐く人であつたと聞きましたが、私でも矢張り女形か、又は大名とか、上品の役の時は小言をいふにも、和かに詞を遣ひ、鳶の者か、又は三尺帶の時はべランメイが、何しても澤山出ると云ふとです。役者ほど馬鹿氣た者は厶いませぬ。樂屋から其役になつた心持でなければなりませぬ。今の若い人には、夫が無いやうです。只今でも、私は狂言が極ると、其事ばかり思つ　、夢に見るのも矢張其事ばかりです。

藝に熟し、之に達するものは、實に如此く無んば非ず。前の

宇高喜大夫に就きては又一話あり。其養子四郎三郎が修行最中に阿漕を習ひたるに、養父は網の引方悪しゝといひて許さず、幾度か工夫を案じて問へども、なほ悪しと呵責せしが、喜大夫或時四郎三郎に教へて、松前濱に至るべしと云ふ。四郎三郎其意は知らねども、教のまゝに城下を去る二里許の松前濱に至りて見れば、時は恰も十五夜過ぐる頃にて、漁人影多し。鰯網を曳きけるを見て、養父の教はこれなるべしと感發して、網引の處に交て、網綱を引かし呉れと頼みしかば、意に任せんといふ。四郎三郎之を引くと暫くにして漁人敎へて曰く、足の踏方悪し、手は亦斯く引くべしと叮嚀に敎ふ。敎の儘にして引きしに、程なく引揚げたり。かくて翌夜も往き、又両三夜往き試みて徹識したり。其後養父に阿漕の一見を請ふ、養父之を見て汝徹悟したり、此事も臨時にて往けば質なし、其實を得て修すべしと教へたり、四郎三郎も此時より太夫となりたりしとぞ。之れ其實物によりて、開發的教育を施したるものといふべき。凡そ技藝は、自ら感發する處あるに非ずんば、焉んかよく其精妙の域に達せんや。

音讀の弊害

二〇

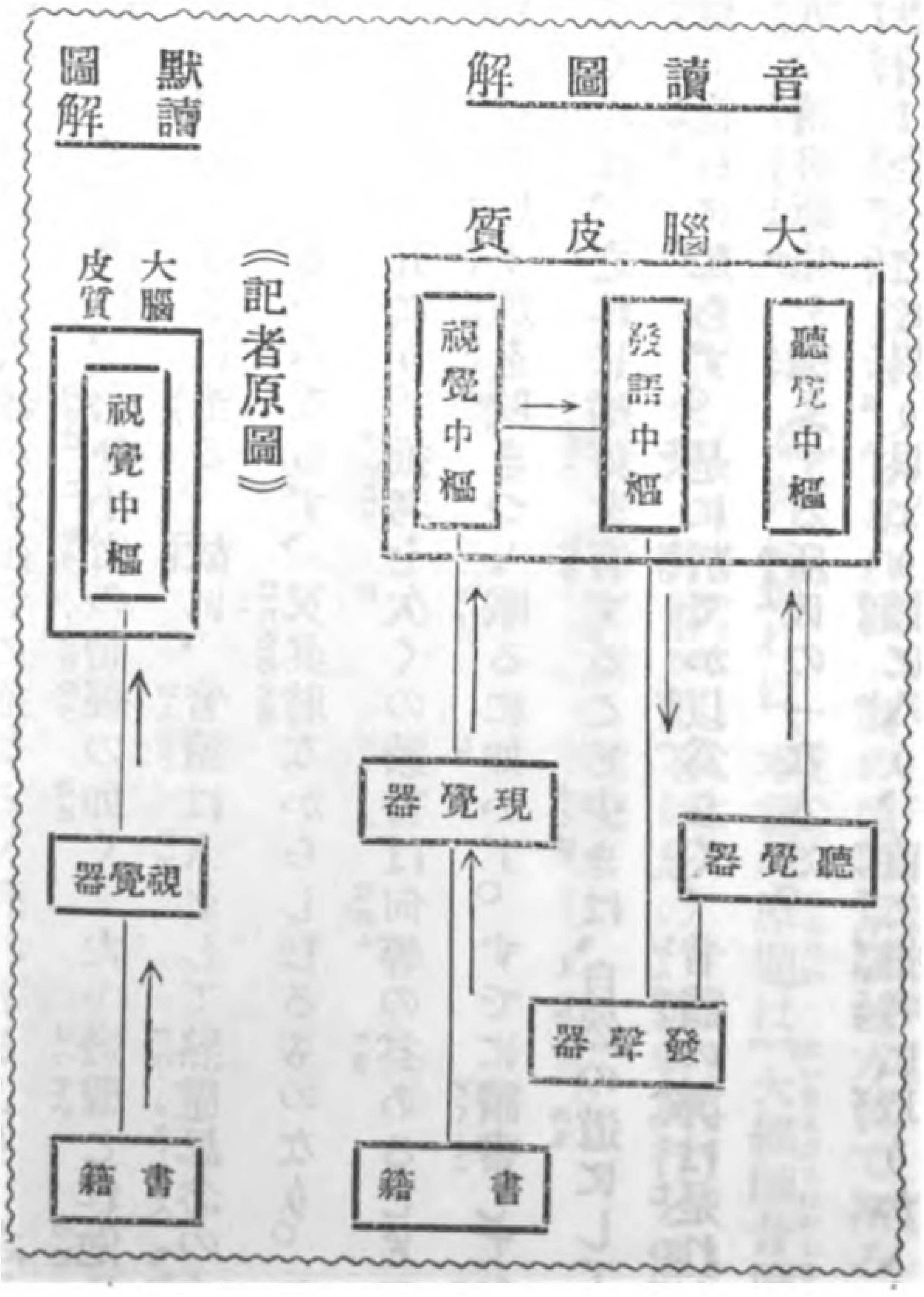
青柳有美

三千世界廣しと雖ども、わが邦人の如く、讀書の嗜好少きは、亦多かるまじ。蓋し其所因するところ多々なりと雖ども、音讀の法盛んに行はれて、黙讀の慣習諸人の間に薄きが如きも、確に其原因の一なるべし。曾て、北米の教育家ノースロップの來遊するや、かの樹栽の奬勵と共に、音讀の害弊をも、僅に說くところありしが、人殆んど捨てゝ顧みず、しきりにたゞ樹栽の一事を喃々せり。夫れ音讀は讀書の大敵なり。我れを以て見るに、黙讀の行はるゝこと普からずして、讀書の趣向隆んに勃興せんことの如きは、到底得て望むべからざるものなりとす。

我がなほ郷里に歸住し居るの日、居室にあてたる二階は、縣立師範學校寄宿舎の自修室に臨み、よく其内狀を通觀するを得たりしが、生徒多くは皆な音讀にして、喧々囂々宛然蜂巣の如く、殆んど耳を聾するものあり。加ふるに寄宿舎の組織たるや、純然たる軍隊制度を摸するにおるを以て、一室の員數、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

常に三十人を越ふるもの丶如し。されば、其處に人あり、少く聲をあげて誦讀せんか、他のものは之によりて其想思讀書を妨げらる丶を以て、又勢ひ、稍々前者に勝れる聲を張りあげて、之を打ち消し、己が讀書を續けざるべからず。玆に於てか、一人の音讀者あれば、續き續て益々其聲高く全室卅餘人擧て皆な音讀となり、是處に植物學をうなるものあれば、彼處に漢書の素讀をなすものありて、鼎の湧くが如しとは、眞にか丶ることにやあらむ。故に以爲らく、音讀は秩序を亂り、傍人想思の煩ひとなること尋常ならずと。これ其害弊の一なり。ショウペンハウエルは、曾て、聲音の、思念を破ること夥しきを說き、街路に響く御者の鞭音と、嬰兒の泣聲とは、其最も甚しきものたるを曰ひしが、我れは寧ろ音讀の聲を以て、思念を傷ふものの主位となさん。しかのみならず、之を生理の上に論じ心理の上に考ふるも、音讀のことや、頗る損多くして益少きものなり。今乞ふ試に音讀と默讀との利害得失を比較硏究せんか、下に揭ぐる二圖の明に示すが如く、音讀は默讀よりも、先づ殆んど三倍の手數を要するものなり。若し默讀法によらば、書籍は視覺器たる眼を刺戟し、之が感覺を大腦の視覺中樞におこして、直に思考に取りか丶るを得べしと雖ども、音讀に於ては、しかく簡易なる能はず。視覺中樞より又刺戟を發語中樞に傳へ、その刺戟又傳へられて發聲器たる聲音帶及舌唇等に到り、之を動かしめて音をなし、



その音また聽覺器なる耳を刺戟し、その刺戟又新に傳へられて、大腦の聽覺中樞に至り、後始めてよく思考するを得るなり。ヘルムホルツ及ベクストの兩氏に隨へば、凡て神經力の傳導も、又時間を要するものにして、その速力一秒時に廿九米突

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なり。又音響の傳達も、一秒時に三百三十三米突を限り、これ又時間を要するものなるは、物理學の敎ふるところなりとす。これらの時間たるや、一見微細なるが如し、と雖ども、其實決して然らず。光の速力は頗る迅速なるを以て、書籍より發射する光線の、眼を刺戟するまでの時間は、殆んど零に等しと雖ども、口を衝て出る音聲の、耳に入るには、なほ暫くの時間を要すべし。故に、手數に於て三倍を損する音讀は、時間に於て三倍以上を失ふところあるなり。換言すれば、默讀三枚の間に、音讀漸く一枚以內を出でずとの意なり。習慣は稍々、其時間を短縮するを得べしと雖ども、音讀の損失も、是に至りて又少なからずといふべきか。是れ其害弊の二なり。又音讀にありては、聲音帶其他の發聲器を使用すること間斷なきを以て、たゞ無益に體力を消耗し、時には呼吸機病を引き起すの恐れあるのみならず、心意力の多分は發聲聽聞の二事に注がれ、之を推考のために餘すところ少きに至る。故に以爲らく、音讀は勞苦多くして、却て讀書の精隨たる推考を欠くに至らしむと。もし果して然らば、その他人の迷惑おも顧みず強り上げたる蚊々の聲は、何の意味をも有することなく、古寺の鰐口にも劣ると見るべし。之れ害弊の三なり四なり。音讀の熟慮深考に害ある所因はまたこれのみに止らざるなり。かの書籍より入りし刺戟の、眼より腦に入り、又出でゝ口に至り、耳に入り又腦にゆくも、若し是處に至りて、躊躇熟慮せば、發聲續かず讀音の途切るゝ恐れあるより、之を避けんと欲せは、勢ひ小僧の讀經の如く、たゞ發聲これ勉めざるべからざるに至る。故に、音讀は人をして熟慮思念の力なからしむるのみならず、又其時なからしむるものなり。これ其害弊の五なり。推考を欠くの讀書は何等の益あることなし。寧ろ悠々煙を吹きつゝ眠るに如かず。すでに讀書して益なくんば、之れに嗜好を有すること少きは、自然の道にして、敢て怪むに足らず。是に於てか以爲らく、音讀の弊は是れ邦人の讀書趣味を薄ふする所因の一なりと。默讀は全く之と異り眼より腦に入り、直に推考に取りかゝり得るを以て、たゞに時間の經濟たるのみならず、又心意力の經濟にして、眞の讀書をなし、熱實なる讀書趣味を起すに、預りて力あるものゝ如し。されば、音讀はたゞ所謂『すべり讀み』をなすに止まれど、默讀は能くその內容を味ふに至ら

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

しむといふべきか。故に目下の急務は、各學校殊に寄宿舎内の默讀を奬勵すること是れなり。然るに、各縣の中學及師範等の諸學校を見るに、多くは、毎日一時間乃至二時間の默讀時間なるものあり。我れを以て見るに、これ却て音讀を奬勵し、默讀の慣習をそぐ所因のもの丶如し。蓋し、特に設けて『默讀時間』といはゞ、他は悉く音讀時間たりとの意に等しく、生徒をして、音讀は讀書の常なるものたるを思はしむればなり。依て思ふに、各校みな此の默讀時間なるものを廢止し、土曜日曜の外は、一切音讀を禁止するの制度となし、默讀は讀書の尤も常なるものにして、音讀の如きは、却て其異數たるを思ふに至らしめば、希くは、この弊風を矯むるに庶幾乎。

雜錄

評釋『戀八卦柱曆』

八濱掬泉

（一）由來

本篇は近松巣林子が五十四歳の作にして、彼の『淚の鼓』の作よりは一年前、則ち寛永三年九月廿一日、始めて難波竹本座の切狂言に出だせしもの也。趣向は專ら嫉妬を骨子として、夫れに浮世の義理を纒綿せしめしもの、一言に評せば義理人情の衝突譚也。而して貞享十三年出版の、井原西鶴が『五人女』に此の事を詳叙せしを見れば、其の頃ろ京阪地方にて斯る事實ありしならん乎。某書に據れば、本篇の原題は『大經師昔曆』なりしを、天文五年十一月翁が十七回忌の、追善興行を催し折しも、當今の『戀八卦柱曆』と改題せしとなん。

（二）梗概

◎上卷

▲場所　京都四條烏丸通大經師以春宅

▲年月　貞享元年きのへ子の十一月（自朔日晩景 至二日早晨）

▲人物
- 主人　大經師以春（廿二三歳の浮氣者）
- 妻　阿三（十八歳の勝氣な女）
- 手代　助右衞門（廿五六歳の姦智者）
- 同　茂兵衞（廿四歳の實體者）
- 下女　玉（十八九歳の怜悧な女）

◎中卷

▲場所　洛外岡崎村（一、講釋師赤松梅龍宅 二、黒谷菩提道）

▲年月　貞享元年きのへ子の十一月（自三日晩景 至四日早晨）

▲人物
- 講釋師赤松梅龍（七十歳　玉の伯父）
- 岐阜屋道順夫婦（阿三の兩親）
- 阿三、玉、助右衞門、茂兵衞、駕舁二人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉下巻

▲場所　丹波柏村(?)茂兵衛が住居

▲年月　貞享二年きのとの寅の正月三日宵後

▲人物　家主助作(助右衛門の從弟)、助右衛門、梅龍、阿三、茂兵衛、捕人五六人、

(上巻)貞享元年きのへ子の十一月朔日、來る丑の初暦を今日よりひろむる古例に任せ、主人の以春は暦献上の祝の酒に、醉ふて火燵の高鼾し、帳場には番頭助右衛門が、しかつめ顔で諸口世話日、其處ら近邊を見廻し〳〵出で行く跡に、内儀は下女の玉を敵手に、男の噂に盛る婦女同士の、果は飼猫の三毛を捕へて婦道の教訓、間男しの淫猥もの、粟田口に往きたいなと、後の我身を魂が前に知らせて、祝日に追かけ奥に入りければ、玉が膳立の所を以春ムク〳〵起あがりて、後抱にひつたりと抱締むる途端い、下立賣の姉がお出の由を案内されて、南無三寶、是はならぬと云ひ捨て奥に逃げ込む、折しも手代の茂兵衛が暦くばりてさき〳〵、ふるまひ酒に醉ふてふら〳〵歸る處へ内儀の阿三、奥より出で、茂兵衛を呼止め密にもかこ〳〵、里方の不如意の始終を述べ立てつ、お前の手で一貫目調へて親達の苦を拂ひてたも、と染々くどき頼まれて、茂兵衛も一盃機嫌、輕く請合ひし者の、迚も金策の途なき儘に、一時の横道も主の爲と思ふ心に勵まされ、乾と近邊を見廻しながら、主人の印判そつと取出して白紙に、押の強き盗人と助右衛門の大聲に、家内は騒立ち、阿三親子は胸ぎつくりの、頃しも二年前から茂兵衛に心をかけて、命も捨てんと思ひこむ中居の玉が、茂兵衛の罪科を我が身に被て、詫ぶれば募る以春が戀の闇雲。忽ち茂兵衛を縛りつ明屋に押込めて、明日の詮議を待つ夜半なかの、玉が寐所におさん他眼を忍びて、主従が話片手の物語に、夫の以春が悪性を始めて聞きし身の妬さに、今宵玉が寐床に以春の忍ぶを待ち恥かゝせんと、婦女同士の相談にも二人の寐所を代えて睡りしは、後に大難大罪の起るとは知らぬ身の茂兵衛は、玉が思を晴させ情の恩を送らんと、頭巾眉深に明屋の二階を拔けて、窃に忍ぶ玉が寐間、暗まぎれの取りちがへに、手と手を引寄せて結ぶ縁の始は、身の上の仇となりにけり。最早や五更の門の戸をどん〳〵、戻ツた〳〵と呼ばゝるは以春の聲、助右衛門が提げて出る行燈の光に、顏を見合す夜着の内、ヤアお三様か、茂兵衛か、ハアハア、

(中巻)洛外岡崎の村端に、見る影ほそき釣行燈太平記講釋、

玉が爲には伯父請人の赤松梅龍が門口に、籠舁寄せて縄付の玉を引出し大聲あげて、主人の内儀が姦通の中立した罪人の玉めを預けた、と云ひ捨て立ち歸る、助右衛門の後を追ふて、梅龍躍出で、敵手の頸首を無頭と引掴み鐵拳縱横、存分に助右衛門を打懲し、縄ほどかせて玉が手を取りながら奥に入る。むすぼれてなまなかつらきみだれ学の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀となりて、大津伏見を浮々と、果は玉が在所の岡崎に迷ひ戻りつ、行燈をたよりに立ち寄る軒端の、内には伯父姪がくどき泣、外には二人が立ち聞て涙を洩す戸の隙間、聲なき冬のきり〴〵す壁に縋りて泣きゐたる、折から道順夫婦は娘が浮名かくれなく、命がつらき老後の恥を闇に包みて、月出ぬさきに黒谷詣の、親の姿を見つけて走せ寄る二人を、杖ふりあげて追ふも、追はるゝも哀はおなじ涙の闇の、鳥の聲かねの音にせかれて、さら〳〵と泣き別かれ、父が歸れば母が止め、母が歸れば父が止め、おさん茂兵衛は歩みかねて、名殘を惜む土手の二人が影法師、隣が軒端の物ほしの、柱二本に月影の壁にあり〳〵うつりしは、うき身の果のしらせかと、又絶かねて泣く聲に、内より顔を出すは誰と白露の、玉ではないか阿三様、さら〳〵の聲の中、早や谷の後夜の鐘聲。

《下巻》　春たつや去年の雪げを其の儘に、霞むや山の奥丹波の、助作が持家に佗住居せる、阿三茂兵衛の二人は、遂に助右衛門が從弟の助作が案内に、哀はれ捕手の高手小手、斯る處へ赤松梅龍は、玉が首を證據に二人のあかしを立てんと駈け附けし者の、事々齟齬して殘念至極の思出に、責めては己れをと助右衛門に一刀あびせ、眞額割られて逃ぐるを、尚ほ追ひかけて往く梅龍を大勢抱留むる。留めて止まらぬ白駒は、二人を乘せて棄てに往く都の果の粟田口、道順夫婦の命乞、東岸和尚が法衣の德、諸人わつと感ずる聲、道順夫婦の悦び、の聲はつきせず萬年暦、むかし暦、新暦、當年末の初暦めでたくひらきはじめける。

《三》　性格

脚色複雑にして場面濶大に、個々の人物を擧げて巧に、夫が外物に應ずる差別を、描寫せるの點より論ぜば、此の『柱暦』の如きは、蓋し『涙の皷』の比にあらざる也。即ち、此の作

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の阿三が良人の以春、手代の茂兵衛に對する因緣は、彼の『淀の鼓』の阿種が良人の、留守の間の酒の戲れに、初對面の源右衛門と不義せしと云ふが如き單純なる關係にあらずして、寧ろ阿三對以春の間には、義理、人情、戀慕、嫉妬、感謝、嘆美、戀愛、好意、犧牲、同情、薄情、冷淡、過失、齟齬などの諸念の糾れつ縺れつ、遂に謂ゆる境遇我の爲に、生得我の墮落を招致せしならん。而して作中最も性格の活動せるは、阿三、茂兵衛の二人にして以春、梅龍、道順、玉、助右衛門などは、例の類型にして當元祿時代の旦那、浪人、親爺、腰元、惡黨、堅漢を示せるに過ぎざる也。故に吾人は、專ら阿三が性格の剖析を主とし、之に交ゆるに以春、茂兵衛の評論を加へて、聊か本篇の審美的批判を試みんかな。

一　以春の性格

〔上巻〕次[illegible]の傍に、「梅の暦の根本大經師以春とて、稼いらずの長ばなり家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り名だかき[illegible]」と、以春の家系身分を叙して尙は、「算用場には代々[illegible]の枚包、江戸大坂へくだし暦、通う[illegible]

[illegible]

子供の版さばき一門振舞の祝儀の使い、竈の『霞鱠』の雪春めき渡る播鉢の音』と、家門繁昌の摸様を寫せしより考ふれば、洛中に隱れなき大家の世繼、而かも親爺が手塩の一人息子なりければ、蝶よ花よと乳母日傘に甘やかされて、頓と浮世の味を知らぬ身の、兩親の亡後は恐い者を頭に戴かぬ丈に、遊蕩仲間の朋友よりは金に自由をきかせ、我意の無理も笑ふて通さるゝやうになりては、「なほも手代の助六衛門この家のたばね綿の小紋の羽織」と、一家のたばねを番頭に托しながら親讓の財産の有にまかせて、晨は祇園の花に蝶と狂ひつ、夕は島原の月に鴨と浮かれて、元日より大晦日まで色に遊ばぬ事なき程の、放蕩三昧を盡せし果は妙なもの、春の花の遊びの歸途に、四條室町の今小町といへる岐阜屋が娘の、阿三が仇な風俗を見初めては、流石の以春も焦れこがれて、「年へいらぬみやげもいらぬ」と、急き立てゝ遂に吉日を撰びて阿三を迎へしは、以春が二十歳の春なるべし、衆道女道の遊興に飽きし身の、以春も阿三を妻としての當坐は、蚊屋を二人で疊みけりと川柳の穿ちそ其儘に、「扱いとしいはをさな馴染の以春様」と、ふたとせの程は夫婦のかたらひふかく過しけるに、根

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が浮氣の以春なれば、何時の間にやら下女の玉に戀慕して、阿三の眼を忍びては玉を後抱に、『サアうつくしいめねこどらへた』と、乳の邊へ手をやれば、『ア、こそばわ、またしては〱だきついたり手をしめたり、一度がちやう阿三様に告げてどこもかしこも紫色に成ほどつめらせますア、うるさや』と、身を蕊搔いて振放せば、『どッこいやらぬ』と、引き寄せ、『むごいぞえ〱毎晩、ねどみにお見廻もうせども、一度も本望とげさせぬ　我ゆへに此の以春名をかへてかまたりの大臣、玉をとる思案ばつかり』と、抱占められて、可愛や玉は鷹に捕られし小雀の、弱き力を絞〱顔を蹙縮めて、『どうなりとさしやんせ、こちや阿三様にいふ程に、あれ阿三様〱』と、聲張あげて叫べども、『ヤレやかましい其外おさんわにの口くちのついでに口々』と、顔を摺附くる折から門邊に姑の、案内の聲の聞えて、『是はならぬ』と、云ひ捨て奥にかけこむ工合、浮氣者の本性あらはれて、實に蹙縮數廻せしむ。殊に、阿三が里の爲に金の才覺を手代の茂兵衛に賴む條に、『以春様に云ふたらば、つい埒はあくけれど』と、謂ふに到りては、夫婦の間柄も推量られて、一段の哀を催ふさしむ。蓋し、玉が以春の不身持を擧げての末に、『さもしい、きたない、卑怯至極な旦那様』との一言は、能く以春の性格を暴露して遺憾なかるべし。則ち、禀性卑野にして思想輕薄、一向に洒落、滑稽、仇口を並べて悦ぶも、人情、義理、悲哀の趣味を解せざるもの。切言せば、喜劇の主人公なれども、決して悲劇の人物たる能はざるもの。世に謂ゆるさもしい、きたない、卑怯至極な以春なりしならん。

二　茂兵衛の性格

以春の人物品操に比較して、天地月鼈の差あるは、手代茂兵衛の性格也。則ち上卷に、『奉公を出過ぬ氣立、傍輩の下手にいくも我からの』と、謂ふ句ありて次に、はしたなき婦女部屋の噂にも『あいそらしうて、いつ腹立つ顔を見せず』と、下女の玉に讃められ、『賴むはそなた計』と、内儀の阿三に賴まれ、惡事露見の條にも、『去ながら今日まで茶屋の見世に腰かけず、骨牌うつ様存ぜず、人並に着更は持た』と、以春の口から辨護され、『ちたいわたしがあの人に、骨身にそんでほれまして』と、玉が二年の長の年月くどけども、器量に似合ぬかう

とうな、かたくるしい、へんくつな生れ付き、奉公の内いかなをなどの手をも握らぬの、女どの顔は明た眼で、みる事もいやじやの」と、なか〳〵靡かぬ程の謹直方正、忠義一圖の人物にして多感多情、情に弱く涙もろき男なれば、屢ば情緒の衝動に促がされて、意志の判斷を誤りしならん。例せは、内儀阿三に企策を頼まれては、「他人さへ頼まるゝつまる所が主の爲、たとへしわざはまがる共」と、他人の難儀を見ては忍びざる身の、遂に円春の印判を盗み出し、白紙に捺して不慮の罪に落ち、玉が無情なりし我に對して、恩が仇なる熱誠に感激しては、「たとへ此儘しする共、一生に一度はだふれて、玉が思を晴さむ、情の恩を送らんと」と、熱情に驅られて、意外にも主人の妻と肌を觸れて、遂に破滅の不運に陥る。按ずるに、斯る性格の茂兵衛なりければ、「我ら男のつらをさげ夜な〳〵のわざを仕出し、さめ〳〵ながらへ有事も、阿三樣のお命を何とぞと存ずゆへ」と、罪に咎を重ぬるとは知りし者の、不慮の災難に夫と離れ、親に棄てられて天涯孤客の阿三を、人の妻とは云ふ者の、殆ど世間知らぬ十八九の阿三を、他國三界に振捨て一人自己の潔白を證せんとするが如きは、實に茂兵衛の爲すに忍びざる所なりしならん。蓋し、騒動以後に於ける茂兵衛が擧動の、或は人をして顰縮せしむるが如き點なきにあらざれども、其の衷心の奥底を叩けば、凜然たる至誠の熱火を觀るべし。換言せば阿三と驅落せし事も、一種の情交を結びし事も、皆な悉く忠義の化身に外ならざる也。彼は捕人に追はれて、宮津の縁者が元に身を隱さんとする條に、『運つきて、死ぬる期に極つたらば、日頃まをす通り悪縁と思ふて下され、私ゆへに大事のお身を捨させました』と、謂ふに到りては、想ふに運命の爲に破壊せられたる理想の、餘影を望みながら苦慮煩悶、常に愚痴の繰言を口に絶たざりしならん。

隨感

○除夜會

除夜更闌きて陽氣將に動かんとする刹那は、明治三十一年の最後の時にして、同三十二年の最先の時なり。此時此刹那より一會を開き、嚴そかに紀念反省の集りを催ふすは、吾學園近年の常例たり。去年の此時は南征して在らず、孤り臺北城

内の一客舍に、蚊帳を吊して其が内に端座して思を合せぬ。今歳は存外に静けく年を超すとなりて、此夜席上にあり。同人談話の緒に尽して吾が感慨を告げぬ。夫れ、除夜新年の詩を作らばやと徹夜孤燈に侶し、只但だ一心に平仄を索めし二十年前學窓の記憶を第一として、或る年は貧に咽びて世の過しがたきに恨み、或る年は一歳の塵芥を空に歸して徒勞の功なきに嗟歎し、或る年は奇しき念ひに驅られて狂わしき計りに徹夜泣き明かし、又或る年は厭世絶念して冷として白眼し、人の奔走と屠蘇の用意とを嘲けりさげすみ、又或年は地震慘憺の跡に物思ひして天災の莊嚴を念じ、又或る年は家を燒かれ室を失なつて寒衾冷席の裏に幽明を思ひたるなど、其の折其年の記憶鮮やかに浮び出でて万感去來して止まず、實にや歳末の時、歳端の時と差別何事ぞ、時に別狀あるにあらず、但だ機の異なるをもて感を異にす。正に是れ想念に刻み、思情に鏤ばめて、機輪一轉の印しを深くするを可とす。余、諸子に告げて曰く諸君必らず、回顧あらん、異日決して今夜を忘れがたけん、日月梭の如く、三百六十五糸を朝夕に綾どり、一歳の織る所ろ如何の布、年々に卷く所ろ如何の帛ぞ、余すべて諸君と同もに縱横の絲を混じ、同もに一面の織物を成せり、因緣何もぞ、濟生の消えがたきを奈何ん、諸君蓋し他年に於て深酷の回顧あらんぞ。旣にして東風徵しく來る。曉氣正に熟す。

○怪しき述懐

左るにても淺々しき人の推量かな。左程の屈托にて吾心のむすぼれ、吾情けの碎けんと思ひ得る長閑さこそ浦山しけれ。抑も〱吾が秘め事を孰か知るべき。虫に慨き月に恨む時だに、心の限り泣きたることてはあらず。但だ思ひ替え、反らし慰さめんとて、わざと勇ましくする事々だに、心得ある人の見たらんにはと用意すれば、其の端を露はすとも覺えず。聞くならく、初ひ心の常として、切ては其情懐の動搖を友に語り、一つには誇るが如く二つには歎くが如くもてなすとの有りがちなれど、吾は斯る稚々しき事に慰さまんとするには余りひねびたり。人情の變轉と、相思の移り易きとを善く辨まえ、夏の次に秋あり、花の後に落花あることをも知らざるにあらねば、何とて覺束なき人の心の誠にのみ信を置んや。此の信人の上に置かず、只だ自からの至らざるなきを信ず。自か

二九

ら信じて疑らざるに、夫れ何ものの能く動かすぞや。胸を撫して忍べと言ひ、枕を抱きて密かに泣く、夢に自由の境あり、曉の遅きを祈るのみ。盟つて吾が心中を明さず、盟つて語常に首尾を求めず、只ひとり衷ひに懐きて吾が誠を動かしがたきを信じ、歳月の速やかにして、吾老到らんを待つ人よ、奇しめ、吾が眼の屢ばうるみ、吾が容の屢は細る何故ぞと。吾は其の研究の如何に深刻なるをも顧みず、遂に吾が秘密を知り得ざるとを知れは也。玆に其の騒ぎを一興にせん。左るに一も騒々しき人の世の様かな。

○長恨の佳人に問ふ

あはれ御身、世にすぐれたる物思いと、詠がへし難き操とを具して、盤の身を焼き、かげろふの自から食ふに似たり。苦しびて息を長くし、切まりて恨を延うべても、世の浮きたる舟に乗らず。華美顕榮を外に見て、なみ〳〵の快樂にちとの望みもなき爲躰、思ひ定め玉ふ心の中の如何に殊勝ぞや。聞まほしきは、失戀の故か待つあるの故かとの疑問なれど、其の失なへると待てるとの何れを問はず、もし偏は懸然として意中に其人存し、其の理想欠けたるとなくば、則はち之れ獻身最上のよろこびならめ。童んべは泣く斗りにして得たる玩具を自から毀ち、姫たちは生命にしたる晴の衣裳に汚點をつけて泣くとあり。もし夫れ幼なき人等の戯むれに類して、一と度ひ得てし寶に厭果つるとのあらんよりは、及かず初めより傷なく欠なき愛の情を理想として其の誠を永續せしめんには。人生の悲しきは、失戀にありといへど、之を得て而して失望せんよりは遥かに優れり。紙よりも薄く、紙よりも汚れ易き人情にまみれ乍ら、終生契思を變へずして長久の操を所持するは、寧ろ脱膩ならずや。余は反つて其人に賛同せん。

○卓識なし手腕なし

假令ひ誠實にして勤勉なりとも、識見の卓抜なるもの無んば大節を誤まらざるを得ず。識見にして能く卓然たるも、手腕の之に伴ふにあらざれば、功業を成すと能はず。有志生れて此般の感慨なく、修養なきは死せるに等し、何んぞ顧みるに足らんや。左れど、識見と手腕とを養ふは、私心なく我執なきに及かず。私心なきときは公眼あり、我執なきものは、大

勢に通ぜず、自から識見の朗然として千里に通ずるある也。且つ夫れ私執なきの手腕にあらざれば、一揮正鵠に當らず、大抵は要緊より外る。悲しひ哉、今人の自から修むる、其の末に忙はしくして、其本に忘るるとの甚しきや。

○吾豈に賢を増さんや

機、日々に轉じ、時に大機あり。勢、時々に動き、偶たま大勢を生ず。此の機活機、此勢實勢なり。人之に乘ずれば迂者も達人の如く、人之に外るれば、智者も愚人の如し。其の顯然たる實例は眼前にあり。政界、教育界、宗教界ことに尤とも甚だしからずや。誰か數年前の先輩の今ま俄に阿房氣に見ゆるとをのみ嗤しとして、此の如く見え初めたるとの只だ勢機一轉の故に由る所以の理を覺らざるや。之を覺らざるものは只亦た無心にして今の勢機に伴乘するのみ、久しからずして亦た外に棄らるべきの徒か。嗚呼、吾が識見の俄かに進步せしにあらず、吾力倆の急に立優りたるにあらずして、先輩の如何にも馬鹿らしく如何にも不甲斐なく見え初めなば、須からく吾が誤りを止めて仰いで一葉の落るを見るべし。天下今ま時節のかはり初めたる耳。

時事

新年新希望あれよ

鵠村

苟も人生に處す、希望なくしては、一日だに安泰にして過し難し。希望は人生の命脈の由りて繫がる處、而も一家、一國も亦、之ありて後、はじめて活動するものにこそあれ。刻々時々に新しき希望を加へて、人は家は國は進步すべく、此外何か進步の經由する處あらんや。

新年愛に來復す、これ此時は、家國人共に盛大の新希望を呈起し來るべきの時なり。

春風高下なし、花枝自ら短長すとかや。天は無意にして、四時活動す、四時の活動また無心なり、之を有心に解了して、意あり情ありとなすものは、たゞこれ人の業なるのみ。然らば誰ぞ天に於て、特更に新年を劃別せんや。除夜の昨日も、元旦の今日も、四六時の運行、何の差異かあらん。されど人は暮れしは舊年、開けたるは新年、一夜を隔てゝ維れ新なりと稱し、顔を改め、貌を改め、聲を改めて、履端の正を慶賀し、賤が伏屋、昔の舊年に辭ひたる、屠蘇なば、今日互に酌みかはして、欣々乎として騒ぎをなす。

希臘の古へ人は舊年の夜、新年の曙を形とりて、老面と若面とを有する神を理想し、之を崇めて、ジャヌスとはいひき。人の新年を定むるは、實に此理想の古今を通じて存在するものなり。維れ日に新にして、また維れ年に新ならんとは、人の欲する處彼は時を劃して一轉化せんとを欲するものなり。さればこそ三百有餘日、變化移動の多かりし過去を、去年と唱へて、暗き幕屋に陰くらせて、新年の新をいひて、心を新にするとを求むるなれ。二年を通じて本年といはんも、去年今年といはんも、月日の數素より算を異にせず。されど、二年を以て假に一年とせんか、人は其長きに飽き果てぬべきなり。

されば知る新年の定めあるは、新希望を起すべき時と定めたるものなるを。新年と新希望、これ相待つて分つべからざるもの。然るを前途茫々として希望を認め

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ざるに新年を迎へたるもの、豈に何の慶賀の辭を有せんや。同時に、春を耕すといふ、耕は即ち收穫の希望なり。天地の運行、由來無心なりと雖も、人之を記すれば、木芽出で、花咲き、實り、一年四季の景を設く、其の希望の新春に充滿せるを認めずんばあらず。之を認むるが故に、元日の空、何となく昨日にかはりて一新せるを感ずるに非ずや。新春は實に新希望を起すべきの時なり。此時を以て天地油然として、新希望に滿つるを感ずるに於て、人にして、家にして、はた國にして、新希望なくして、よく此時に處すべけんや。

明治音樂會の昨今

有美記

紀貫之、古今集の序に小野小町が歌を評するや『強からぬに、女の歌なればなるべし』といへるはまことにて、樂の技においても、女は凡て力乏く勢ひ至らざるもの多ければ、昨年の納會に於ける西川瑞子孃の獨唱ほど、否もなく意味もなきものは多くあるまじ。その聲の輕さと歌ぶりとは橫濱のミッス、トーマスに似て、拙の拙、醜の醜なるものなり。曾て忍が岡の樂堂にトーマス女史を聞くや、思はず涙に咽びたりしが、是れは聽き終りて何物をも殘さず、たゞ胸のムカツクのみ。その聲調を大袈裟らしく振り動かして得たふるはずもよけれど、普通の金貨幣の如く思はれて、却て腹たたし。かゝる際は、樂の聖堂を醒ましむべきものに非ず。かの橫濱フェリス女學校の休定子女史など、仲々堪能の獨唱者なれば、明治音樂會たるもの、須くかゝる隱れたる樂人を引き出して、樂神の祭壇を飾るべきなれ⦿モッアート曾て、「如何なる樂ぞ尤も汝が好むところぞ」と問はれしことあり。時に答へて「樂なきの樂」といへり。蓋し、懸停の音を悦ぶとの意なるべし。納會の白眉は六部合奏たるファッシ氏のファンタジーに占められ、よくこの懸停の美を挿み、知らずして「柳の下の幽靈」ヒュー／＼ドロ／＼の思ひあらしめたり。放課といふべきか、納所彌次郎氏は其弧兒の獨唱によりて、殊に、月の少女時代より一大進歩をなせるを示し、音聲の微かになりしは殊にその着きものとも見るべく、たゞ歌詞と歌曲の調和全く至らざるものあるは、何時ながら恨めしき限りなれ⦿セルシエースキー氏の洋琴彈奏（乙）幻影舞踏曲は、女史の平生に似ず、纖巧の出來にて、怪しき幻影の、足脚み輕く芝生の上に現れ出で、月に浮かれて舞ひ去り、はかなく飛び過ぎるに非ざらむやと思はれたり⦿管樂三部合奏アベ、マリヤの曲も、仲々に雛有丸山、中能兩子の絃三絃共に生氣を欠き、『老ひぼれ然たるも、もしや⦿本年の初會は去る四日に開かれ、寒氣のためか、來聽者多からざりしが、第一部第二部とも、皆なおしなべて非常の出來榮えなるも目出たく、多忠基氏が其ヴアイオリンに於て、近頃益々境に入らるゝの觀あるも悅ばし⦿われは此度の管絃樂を以て、明治音樂會ありて以來第一のものといはん。演奏の間、眼を閉して之に聽けば、たゞに形相を脫離するのみならず、また時間を忘れ全く平等界に遊べる趣ありたり⦿ヨセフ、ラインベルガルがバラーデは洲例の瀧廉太郎氏によりてピヤノに奏せられたるも、漸く雅興に入れたりよと思はるゝ頃には早や既に終りを告け殘り惜しかりける。今少く長きを取れりとて人は飽かざるものを近頃に至り此の人往々せき込むの惡習あり。注意せられて然るべし⦿之を要するに、明治音樂會の諸氏は、月と共に益々熱實勉勵せらるゝと雖ども、來聽者の漸々減ずるは悲むべきことなり。こは氣候の關係も多かるべく、世人の稍々之に慣れたるの嫌もあれば、二月は一ト先づ其演奏を休み、三月の下旬新に之を始め、且つプログラム番組の如きも、常に相似て稍々單調に流るゝの恐れあれば、毎會その目さきを更て新たにし、之に聲樂を加ふることも多からば、必ずや人を悅ばしむるを得ん。邦人未だ器樂の妙を味ふの修養なし⦿會長高嶺氏が指揮せらるる

◎駿河臺堂の合唱

の如きは、稍々異る點に於て、忍が岡の合唱に勝るものなり。音樂學校の合唱や、必ず常に一部に制せらるゝの傾きあり、假へばテノルの妙へなる時は、他の三部殆んど消えて跡なきの恨みあるが如し。されど、聖堂の合唱は然らず、必ず四部共に相立ち相和し、その一の他に制せらるゝが如きことなし。曾て青年會館に聖語の唱歌は面白からざる敗れを取りしは、今に記臆するところなれど、もし高嶺氏にして奮ひ起られ、たゞに男生のみならず、これに女生をも加へ、少くその風姿に注意して之を引出せられ、オラトオの小なる如きを造らば、明治音樂會に一層の光彩を添へ、又布教の助けともなるべし⦿またおかしきは、西樂の普及を量にして與れるこの會に、來聽するものゝ篤志は、多く本邦樂のアマター又保護者なることなり。西樂に志するもの、斷死せざるべからず。皇天願くは芥種の如きこの會を祝して無數の保護者を起こさしめよと祈る。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●家婦の阿轉婆　専ら内を治むる、家婦の務なり。然さ雖も風習り俗還るの今日、出でゝ交際場に立つ、亦是れ一種の義務なり。今日の家婦たるもの多少阿轉婆なるを要す徒に深閨に閉籠もるもの、彼が能事に非らず。　（千代田新聞）

●女學生に對する惡口　此頃都會地方共に新聞紙に、『葉書だより』さいふもの始まりて、世人が勝手の事柄を投書出來るやうになり、これにつれて、ポツ〳〵さ女學生に對する惡評見ゆ。此頃見えたるものを試に擧ぐれば、

師範學校女子部の生徒に通行の　さきたもさより嬈学を出して食するものあり。（賀見生）　（京都日出新聞十二月廿六日）

一筆申上候矢部川近傍の或學校へ通ふ女學生校方へ申上候人の顏を御覧ありてお笑ひ遊ばすは合點の行かぬ儀に御坐候（一賀間生）（福岡日々新聞十二月廿二日）

行かず東京で女學生連の東京訛をやつてのけるのには閉口首領だ（領首坊）（福岡日々新聞十二月廿日）

本郷の濟生學舍女學生芳しからぬ評判にて困つたもの（一注告生）（報知新聞十二月十七日）

當地の女教師先生の中で運動に生徒を連れて行くのはよいが自分はよい男でもこしらへたいのか何日も洋傘をさしてゐる、お顏の黑くなるものは御氣の毒ですが餘り感心した事でないさ存じ候（園部見拔生）　（京都十二月廿一日）

拜啓方今女學生の生意氣なるは申す迄も無之候へ共貴校において最も甚だしき者さ被考候徒にお姬樣的生活を慕ひ木葉役人の末葉の娘迄服裝を飾り白粉等をいやに塗りつけたる樣は誠に見れた樣にも之無老人の孫などゝも近頃は餘程此の惡習に染み候やうおぼえて配慮一方ならず可愛い孫を育て傷はんと恐れ大枚二圓の月謝を納め候次第お察し被下度候而して彼等が話す所を聞けば學士の妻君になるなど喋々し學士〳〵さ下へもおかぬ熱心それのみならず學校へは人の爲めに行くやうに考へ只々卒業の名義あれば世間に對して誇るに足るさ謂ふらいひ學校の慰み物は復習はせぬ時はなければ大切の課業はそつちのけ故に其學力のなきを驚き入る外なく外國語さか家政さか物理さか化學さかいへば至高の學科さしてほこりがに話しありき候へ共其實は何にも覺えたる事無之只だ學士を慕ふのみにて痛嘆にたへず候もし學士が此の世になかりさせば高等女學校もそれさ共に消滅するかさ考へられ候何れにいたし候てもかゝる生意氣女學生は到底未來賢母良妻の望みたえて無之候以上は只事實のほんの片隅のみに候へどこれを推して何卒速かに御改良願上候此儘に進み行き候はゞ老人の孫は一人前のもさならず家は破産にいたるべくさ痛心の餘り一札如斯に御座候頓首　塞陋一老人

女子高等師範學校長殿　（一筆新聞十二月十六日）

●屑懸　此の三四年引き續きて吾妻コートの爲めに壓せられ勝なりしが屑懸も今年より又冴へ返りて流行界に幾分の勢力を顯はす樣になりぬ色合は濃茶薄茶等なり。

●紋服問題　麹町區富士見小學校長は「本校女生徒の衣服はなるべく木綿黑紋付たるべきこさ」さ命じたるより、父兄等之が爲に却て迷惑を感じ、萬朝報の如き、華奢矯正の術さして其弊をいふ。

●女子就學增加の傾向　愛媛縣は一般に女子就學の成績よろしからず、三十年末の統計に依れば、百中比例男八十人九分に對し女子四十八人四分三厘さいふ少數なれども、實際は近來女子就學生の增加男子に比すれば著しく進步の有樣あり、明年四月の入學期には大に增加すべし何樣女子の就學多かざれば眞正なる教育の發達を望む可らざるものなれば當局者は一層の奬勵あらまほしき事なり、又縣下今治町宇和島町に高等女學校設置の計畫あり、何れも女子教育のため喜ばしき事なるも、補助規程に該當する丈の生徒則ち壹百廿人を募集するとは難かるべしさ案じ居れり云々さは某教育通の談話　（海南新聞十二月十六日）

●斉酒の度もまた爰に至る乎　米澤の豪家房間某强慾を以て鳴る水力電氣會社の開業式に招かれ折詰及び瓶詰の酒を貰ひて歸る途に競市を開けるを見折詰及び酒を競にかけ金十錢に賣る

●蓄妾　岩代若松に蓄妾大に流行し妾を蓄へざれば紳士さ稱せられず甚しきは學生に至るまで之を蓄ふる者あり、　（以上二件東京朝日新聞）

●全國の戸口　昨三十年末現現在は、

戸數　八百五萬八千四百七十四戸
人口　四千三百二十二萬八千八百六十三人
内（男　二千百八十二萬三千六百五十一人
　（女　二千四百四十萬五千二百十二人

これを、前年末に比すれば、左の增加なり。

戸數　五萬三千六百二十五戸
人口　五十二萬五百九十九人
内（男　二十六萬二千六百二十八人
　（女　二十五萬七千九百七十一人

百歲以上の男女は、この內、
百　男三十八人　女六十五人　百一　男八人　女五十二人

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

百二	男八人	女二十三人	百三	男六	女二十五人
百四	男五人	女十二人	百五	男三人	女七人
百六	男二人	女四人	百七	男なし	女二人
百八	男一人	女一人	百九	男なし	女一人
百十	男なし	女一人			

●新春衣服相場

男子むき

白縮緬羽二重（十一圓五十錢より十三圓迄）白本斜子（八圓五十錢より十五圓迄）白斜子（六圓五十錢より十五圓迄）白市樂（十圓より十六圓迄）■平御召（十一圓より十四圓迄）縞市樂（十一圓より十七圓迄）繋市樂（十圓より十四圓迄）米澤市樂（十圓より十二圓迄）諸糸織（十一圓より十七圓迄）繋糸織（十圓より十四圓迄）米澤糸織（七圓より八圓五十錢迄）縞八丈（六圓八十錢より七圓五十錢迄）本八丈（六圓より八圓迄）大島風通（十三圓五十錢位）大島紬（十圓より十八圓迄）米澤琉球（三圓七十錢より七圓五十錢迄）節糸織（五圓五十錢より七圓）名撰三圓八十錢より六圓五十錢迄）秩父縞（三圓五十錢より四圓五十錢迄）▲御羽織胴裏用時代純子胴裏四圓八十錢より十圓迄）純子紛胴裏（六圓より十一圓迄）▲袴地仙臺平（十三圓より二十圓迄）村上平（八圓より十五圓迄）博多平（十二圓より十五圓迄）▲男帶地　綴男織（十六圓五十錢）繻珍織（八圓より十二圓迄）博多織三圓八十錢より九圓迄）紋博多織）七圓五十錢より九圓迄）

婦人向

風通御召（十四圓より十八圓迄）縞御召（九圓五十錢より十二圓迄）風通糸織（十一圓より十三圓迄）白縮緬（十圓より十七八圓迄）友染縮緬（十圓より十七圓五十錢迄）小紋縮緬（七圓五十錢より十三圓迄）更紗縮緬（九圓より十二圓迄）▲婦人帶地　繻珍腐帶（十三圓より七八十圓迄）博多腐帶（十三圓より十八圓迄　黑繻子腐帶（八圓より十六圓迄）繻珍片側（三圓八十錢より十一圓迄）博多片側（四圓より五圓八十錢迄）黑繻子片側（三圓より六圓五十錢迄）色朱子片側（三圓より五圓五十錢）

木綿物

綿名撰（一圓四十錢より二圓五十錢迄）紡績織（一圓五十錢より一圓八十錢迄）糸入紡績（一圓八十錢より三圓迄）並双子（七十錢より一圓迄）紺双子（一圓二十錢より一圓五十錢迄）瓦斯双子（一圓五十錢より二圓五十錢迄）糸入瓦斯（一圓四十錢より二圓二十錢迄）本場結城（二圓四十錢より三圓迄）綿結城（七十五錢より一圓迄）

●女學に關する新聞の言論

十二月卅日の時事新報には女某の寄書にて「婦女俱樂部の設置を望む」と題して、婦人の社交的團躰として一大俱樂部を東京に設け、漸次地方に及ぼすべく、之を以て天下女子の集會所、談論所、交際所とし、智識、道德、學術、家政百般の研究所たらしむべしとの理想を說けり。

十二月廿六日の「讀賣新聞は「九龍書屋主人」の『新井君美の母』を載す。

十二月卅一日の日本は「垂簾考」の續稿にて、「母后攝政と外冠との史實を說く。

報知新聞に昨年末より見え初めたる「夫人の素顏」は、「伊藤侯爵夫人お梅の事」を第一として、次くに「星亨主人お都奈氏」を以す、星夫人に就きては、其家系の正しく、父は舊幕府の御用達にて建具職たる伊阿彌駿河と云ふ事より、明治五年亨氏が二十三歲にて大藏省七等出仕たりし時に十七にて嫁入し、學問は英も佛も話し、手跡は寺古屋稽古、遊藝も一通り出來、糟糠の妻として夫を助ける事、出代りの下女が「奥樣はホントにお經濟主義とやらで入らしやる子ー」といふよしを記す。同記事新春に入りては、「井上伯爵夫人お武の方」の中を記す。

十二月廿九日の万朝報には、萬國平和主義論の雄將たる墺國ベルタ、子ツト子ル男爵夫人の肖像並に賛傳を掲ぐ。

●淸國西太后の風姿　淸國西太后が容貌美麗にして年齡より若く見ゑさせ給ふとは人の傳唱する處なるが親しく謁見したる者少き爲め實際の御風手は殆ど世に傳ふるものなきが先頃同后が外國使臣に謁を賜ひたる折親しく陛下に咫尺して御容姿を拜したる者よりの來信に依るに陛下には風說の如く御容貌極めて艷麗にして御齡の六十二才と云へるに實際は四十才前後と拜せられ御躰格は敢て大なりと云ふ程にはあられど餘程肥滿せる方にて豐頰低眉玉肌雪を欺く計り圓滿寬弘の間才氣溢るゝが如しと云ふ

●關稅增加と地租增加　本年一月より海關稅の增加するを以て船來品は凡て騰貴すべく、又日時に地租八厘の增加によりて、農民は多少困難を感ずべく、而して市街地租二分五厘の增加は爲に地代家賃の騰貴となるべし。

●單稅太郎ガルスト君長眠す　吾社同人其追弔會席上に弔文を朗讀して曰く、單稅の主義は博愛の主義なり。ガルスト君率先之に殉す。其世にあるや、熱血を鼓吹し、赤誠を標榜す。單稅太郎の名を聞き、誰か悚然として其熱愛に感激せざるものあらし。君、今逝くと雖ども、主動長久に續き、精氣遠永に活き、其無私快濶にして寬容熱實なる光風は、吾等終生の紀念たるべし。夫れ單稅は世界の主義、單稅太郎は吾國の名なり。君、旣に世界の主義を懷きて、博愛に任ず。外來の客にして吾國を客とせず、自ら許して吾等の同胞となる。吾等、君を懷ふて兄弟の感なきを得るや。但感す。其家庭は夫父を失ひ、其國は義人を失ふ。希くは、内外同信の士、同もに、今、其弔意を合し、切に其美績を追賛し、其遺志を發揚せん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

新刊書

◎金色夜叉　　紅葉山人作、春陽堂版

上篇には「宮」と云へる美くしくして操のなき今様女子の性格を寫せしが、此の中篇には失戀反動の意地者、間貫一の行往を巧みに寫したり。一章の中、必らず頓智あり、一文の中必らず妙辭あるは山人の常ながら、此作など尤とも苦心を示すべし。容貌毘沙門天の如く、心蝮蛇の如き一女子を新たに點出し、妙に讀者を惱殺す。下卷の結末を心せきて待たしむるは巧なる哉。

◎山鹿素行、大石良雄　　長田偶得著、裳華房版

偉人史叢の第一輯第三卷たり。偶得氏一種同情あり、毎篇其題目の偉人に熱賛の同情を與へ、身を其地に置きて自ら禁ずるの妙あり、讀者をして感動せしむるは此の故也。末に、小野寺十内が其妻に送りたる玉梓を集め涙襟集と題せしものを添ふ。

◎若菜籠　　大橋乙羽著、博文館版

新たに文士乙羽君の其かみの出で立を知らんとす、當年の若菜の如何に香好かりしかを念はん。藤村に若菜集あり、乙羽氏は之を籠に入れたり。文士は大抵其の若菜つみに於て尤とも情熱あるもの也。

◎女子書簡文　　岡田起作編、金昌堂版

岡田起作氏の書法教授に堪能なるは世の既に許す處なり。氏新に女子書翰文を編し且つ書す。書翰文を學ぶと共に、其書体を稽古するに於て、良書なりといふべし。

◎座右の銘　　裳華房版

人の謹んで聞くべきものあらば、そは大人名士の、時に觸れ感に應じて、胸臆を開きたる片言隻語なる乎。此書は家康、秀吉、清正、芭蕉等、今古の大人名家六十餘人の金言を集め、添ふるに彼等の略傳を以てす。有益の書、其名に背かずといふべし。

◎陸軍の光　　博文館版

少年世界の臨時增刊なり。陸軍の狀態につき、多くの文士筆を執りて、少年の爲に、教へをなすや、到れり盡くせり。

新雜誌

◉日本の家庭第四卷第六號　社會家庭の和樂あり。史傳ジョセヒヌ略傳は那翁とジョセヒヌとの交情を叙し、また平田篤胤傳あり。家庭談林、衞生小話あり。

◉しきしま第四集　此雜誌は課題によりて廣く和歌狂歌俳句狂句を募集し、太田千秋、其角堂機一等諸家の選したるものを載するものなり。發行所は東京日本橋區濱町一丁目十一番地なり。

◎反省の鏡第三年第十號　眞宗寺院の家庭(三)は、高祖妻帶の本意の家庭和樂し夫婦親子一家相扶けて、布教の先導たるべしとの主意なるを論じて、同宗寺院に勸む。婦人年老いたる娘も渡し難しは梧拔教諭の文なり。

◉女學新報第三號　卷首に華族女學校教授渡邊筆子の石版摺肖像あり。上流婦人に切言す(社説)、戸澤かず子の家政經濟に就いて等は記事の主なるもの。

◉埼玉經濟時報第七號　埼玉地方時事の爲に、雜誌の十頁を塡めたるは、地方雜誌の特色とすべき姿を得たり。

◉清議報第一冊　悲しむべきは清國亡命の士、改革の志慎、事果たさずして我邦に客となりて、而して刺客常に後を窺ひ、一日の安を得る能はず。發憤の志禁より禁ずる能はず、爲に清議報を起して、遙に自國の政治を論ず。主筆に任するものは梁啓超氏と聞く。櫻變法通議は滿人漢人の優劣を論じて、漢人を擧ぐ、又去年八月の變を論じて、廢立非を遂ぐるものとなし、皇上の賢逆后の罪などいふ。また其政變の顛末を叙するの文あり、近時支那の政界に通ぜんとするもの讀ます

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

んばあらず。外國論說、東西雜譯、あり、柴東海散士の佳人奇遇を評せるは、以て、彼等志士の志の存する、一端を窺ふに足らん。

◉關西教育第一號　京都より新に出づるものにして關西教育に有力ならんを期するものなり。卷頭には京都の教育を盛んにして、一歩を他府縣に先んじたる故槇村男爵の行條略傳あり。

◉婦人新報第二十號　山路彌吉氏の良心の變遷あり。中に氏の祖母が、幕府瓦解後秋の餅を賣つて、大儲けしたが、米は御扶持米勘定に入れなかつたといふ話あり。小崎弘道氏の社會に對する女子の地位相稿あり。

◉哲學雜誌百四十二號　加藤弘之氏が井上圓了氏の破唯物論を破する論あり。

◉外交時報第十一號　特色なる記事頗る多きが中に、支那保全論に付く、保全に二策あり、同盟擁保策と聯合擁保策と、而して後者を取らんとするものなり。

◉眞理第百六十七號　神の啓示（キリストイーブ）新約書に引用されたる舊約書の語句（ウエント）等、獨逸自由神學說を發揮するに勉めたり。

◉憲政黨々報第二號　大江卓氏の財政政策意見あり。伊藤博文の憲政黨員の會したる演說は、如何に其得意の念に滿ちたるかを知る。

◉太陽第五卷第一號　加藤博士が自家生涯六十四年間の世界の變遷を略述したるあり。井上哲次郎博士の日本民族思想の傾向あり、土方久元伯の官僚史傳、山縣侯の政治的系統月旦あり。

◉經濟雜誌第九百五十八、九號　政論、經濟論は例の如くに盛んなるに以外に、史論には[illegible]氏の念佛宗の由來あり。

◉新佛教第二卷第十二號　雜誌新佛教は、舊派人の紀行く思つて、多年の宿を注ぎ、陸奥居等に向つて、慚愧に洩すものと思ふらし。今號に於ては、神龍一閃、咬菜秘記、航西小記など、多趣味にして、中にも春風の評事史料いよいよ出でていよいよ有益なり。史傳には淵信傳史あり、此雜誌本年一月よりは、以前の宮山房より移りて、嘉華房の手にて出版せらるべしといふ。

◉女鑑第百十一號　自信と守貞、古代の女子道德等、淳々として、保守的女學を說く事、背に依りて樣を改めず。

◉女子の友第三十六號　女學に對して保守的思想を代表するものとも見るべきは是なり。服裝の改良、憲法上に於ける女子の本分等なり、寄書例に由りて面白し。この雜誌の特色にして、欠點なる處は、社論として、一人者の思想を吐くとすることなる歟。

◉教育時論第四百九十三號　社說には「明治三十一年を送る」の文あり、昨年の教育界を略叙す。山本良吉氏の「良」盛んにウーマンスエマシシペーションを論す。

◉教育實驗界第三卷第十號　教育界實に有用の雜誌なり。其論說よりも、其實驗界は此雜誌の特色とする處にして、而して其尤も有益なるものなり。元埼玉縣芳川高等小學校教員中野新左衞門氏の同校生徒往復看護法の如き實に地方教育者の一讀再考すべきものならずや。

◉つぼみにしき第七十四號　水島行楊の「怒奴」東萬浪男の「西約列女傳」其他記載の事項、いつもの如し。

◉日本之小學教師第百十八號　論說、統計、批評、問答、雜錄等、此邊につきては有名な[illegible]の記事を網羅す。

◉教育公報第二百十八號　帝國教育會大れ自身は小學校教員連の持物同樣となりたりとて、他に非難多きが、公報もまた小學校教員連が受持かと思はるゝやうになりたるの觀あり。たゞし、教育界の出來事をよく網羅したるは、いつも公報の名に背かざる次第なり。

◉兒童研究第[illegible]號　論說には女子と兒童研究あり、論の要は題の既に示すが如し、研究、適用、紹介、雜錄等、取捨よく行き、材料よく整へり。有數の好雜誌なるに背かず。

◉日本人第八十二號　社說及び本年の政界を卜する社論は、日本人の特見を以て解釋なるもの、西郷隆盛は太陽に見えたるものと較稿あり。江湖、風聞錄、一時の快讀に値ひするもの。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學事

●群馬縣高等女學設置　客臘十二月十九日の群馬縣會にて前橋市に高等女學校を設置することに決したり。

●横濱技藝女學校設立の計畫　横濱教育會の有志者及び婦人數名發起者となり、技藝女學校を設立することを計畫し、教育會長大谷嘉兵衛氏も大に賛成し、日の出町の刺繍株式會社跡を校舍に充る事に決して、本年一月早々設立出願を準備中。

●共立女子職業學校　神田一ツ橋なる共立女子職業學校にては、是迄毎年一兩回天皇陛下より北條侍從を差遣はされ該校の景況を御下問あらせられ、且生徒の製品を叡覧に供すべき難有御沙汰蒙り居りしが、昨年も亦十二月廿三日右同様の恩命に接したりしと云ふ。

●札幌高等女學校設置計畫　札幌高等女學校設立説は、數年來區民の熱心に希望し居る所にて、現に區總代人會議に於ても之れが設立の議を聞く再ならざりしが、加藤支廳長に於ても右設立に就ては、熱心企畫され居りて來年度區費豫算案には之れが經費を組入れ區總代人の協賛を得ん筈なりと聞く。

●北海道江差女學校の敷地内定　本年を以て建築せらるべき北海道江差女學校の敷地は、同町中歌町檜山漁業組合事務處の裏手即ち正覺院の墓地と内定せし由。

●名古屋高等女學校の内訌　賢明の聞え高き校長棚橋絢子も、女性の悲しさには、部下の教員を圓滑に監督するの技倆に乏しく兎角の折合よろしからず、畢竟は同校教員の總てが女子高等師範出身の所謂若溪會派に屬するものなれば、他籍の人の入りて校長の椅子に就くこと男子たりとも、殆ど見込なき程ゆゑ、棚橋が評判の上らざるは素よりさることながら、近來は校長と教員との軋轢益す甚だしく、果ては生徒を使嗾して校長に反抗せしむるなど、不穩の擧動を演ずるまでに至りたれば、棚橋も今はさて主席教員と共に此程辭表を提出したりと右に就その後任として曾て、彦根高等女學校長たりし甫守謹吾(若溪會出身)本日東京出發赴任の筈なれば遠からず平穩に歸することとなるべし(萬朝報)(卅一年十二月十八日)

●甫守謹吾氏　前項に記載通甫守謹吾氏は此程名古屋高等女學校長に任ぜられたりといふ

●裁縫講習會　福岡縣遠賀郡役所の樓上にては去年十二月十六日より一週間を期して裁縫講習會を開き、各高等小學校の女教師は何れも出席しつゝありしが、其教師は亦間閣補修女學校の教員田近コト子、同教師は元來大分縣人にして、熊本尚絅女學校の卒業生なりとぞ、去る廿二日は岡田同郡長より各女教師へ裁縫分解教授法修業證書を授與したりといふ。

●獻納金御使途　此程御裁可ありし帝室費二千万圓の獻金は有益なる御使途に當てさせらるる思召にて、或は其一部を教育奬勵のため私立學校等へ御下賜相成るべしと漏れ承はる。

◎會合

●日本婦人矯風會の陳述書　過般群馬縣下に於て存娼論の盛んなりし頃、日本婦人矯風會にては非常に其反對に盡力し、時の内務大臣に陳述書を呈出して其中止を請はんとせしも、折しも内閣の更迭と爲りし爲め呈出を見合せたりしが、尚素志を遂せんとて這回内務大臣侯爵西郷従道君閣下に左の陳述書を呈出せり。

謹んで内務大臣侯爵西郷従道君閣下に申す、聞く所に依れば群馬縣に於ては久しく醜業婦の公然營業するを禁じ居りし處此度往年の如く娼閣設置の議あり且實行の運びに向ひ候ひしも更らに中止相成候筈の由、眞に天下の爲めに賀すべき儀と存候、抑も政府が公然醜業婦の營業を認許致され候は國體の上より申すも、日本婦人の體面より申すも、列國に對し大醜恥たるは明白の事に候、唯因習の久しき未だ之を除き去る能はざるは閣下等の常に深く憂へらるゝ所なるべしと存候、幸にして群馬縣は早くより廢娼の率先をなし候へは諸府縣漸く之に倣ふべしと存候ひつるに、事全く豫期と反し、存娼云々の議あるに至り候ひしはたとひ其事の中途にして止み候とも妾等の切に遺憾とする所に御坐候、同縣にして若し一歩を過り候はゞ折角緒に就き候娼閣停止のことも再び舊來の状態に退き、日本婦人の體面を汚し、列國に嗤笑せられ候はんものをと只管恐懼致候、仰ぎ願くは閣下常に地方廳の爲す所に注意せられ、かゝる失策なからしめられ度、全國矯風會員婦人無慮千五百名を代表し謹んで奉懇請候、謹言

日本婦人矯風會頭　矢島かぢ
東京婦人矯風會頭　潮田ちせ

●裁縫研究會と母親懇親會　島根縣簸川郡の各小學校裁縫教員は過ぐる年より、毎月一回宛集會して交々實地の教授をなし、互に其の巧拙を批評しつゝありしが、この頃よりはまた母親懇親會といふを始めしに、其初會は來會者四百餘名あり。母親の任務たる家庭教育に關して研究する所あり、學校との連絡に付き教師に質し教師これに答へて、最後に幻燈會を催し小學校長これが説明をなしいづれも滿足して散會したりといふ。

◎人　事

●忠婢の賞與　昨年十二月十五日付を以て左の如く賞與ありたり

岐阜縣美濃國揖斐郡池田村
河合　チヨ

資性柔順素行方正明治二年山縣郡[illegible]村小澤吉衛門兒女の乳母として傭ふ所となる幾許もなく傭主夫婦病没するに及び父母に代りて克く二兒の教育を完からしめ當主唯次郎入夫の後も忠隨尚ほ曩昔に異ならず明治二十八年主婦ミチを殘して病死せしに依り夙夜慈母に等しく幼兒を撫育し專心恪勤茲に三十年終始一日の如し洵に奇特とす仍て爲其賞金參圓五拾錢下賜候事

明治三十一年十二月十五日

岐阜縣知事正五位勳五等　安藤　兼直

●近藤夫人の美擧　日本郵船會社長近藤廉平氏の夫人は小石川盲啞學校附近の道路險惡にして通行人難渋するも誰れ一人之を修繕する者なきより、自ら化粧料の費を省き修繕費に投じたりと。

●雜件　孝女の敢果き最後　羽前飽海郡酒田町十二番地古物商小野出平吉方雇人吉田さみゑ（二十二）（莊内新報十二月十七日）●貞婦　兵庫縣島田吉松後妻お何（東京朝日新聞十二月廿日）●婦女の龜鑑　福岡縣築上郡角田村大字松江田代伊三郎の妻トセ（中津新報十二月十四日）●今政岡（讀賣新聞十二月廿六日）●雪中梅　代議士門田尙經氏令閨賄賂を退く（讀賣新聞十二月廿四日）●孝女おさら　芝區金杉川口町八番地探偵業成田彌三郎長女トラ（十四）（報知新聞一月二日）●慈母自轉車を毀つ　麹町區有樂町三丁目二番地白石某の母（讀賣新聞十二月卅一日）

●筑紫の孝子　福岡縣筑紫郡八幡村の原田富吉は性質篤實にして夙に農事に精勵し傍ら病父に孝仕する事十三年未だ曾て怠る事なかりしが同縣知事は其德を表旌するため賞詞に金五圓を添へて此ほど下賜したりと云ふ

●兄妹篤行　勢州河藝郡椋本村原田多市同妹スヘ資性温順幼より父母に孝事し長兄病殁後父中風を患ひ母亦病痾にして家事を見る能はず生計困難を告るに及びて互に相勵し交々傭家に傭はれ其得る所を以て藥餌を進め看護二十餘年人の婚嫁を勸むる者あるも孝養の妨けとならんことを恐れて之を肯かず遂に家を興す朝廷延各二十金を賜ひ之を賞す

●盲目の孝子　盲目の親に盡すこと二十餘年　東京府北葛飾郡[illegible]町久松三郎といへるは生れて早く父を失ひ母に育てられけるが年十五に及びて家の柱と頼みし一人の兄に死別れ一人の母親は重き眼の病ひに罹りて活業の勞働に堪へずなりぬさらぬだに淋しき家計はかよわき新三郎がひとりの身に負ふべくもあらねど孝順なる資性は此の少年をして母の饑餓を見るに忍びしめず身を抛ちて晝夜賃役に從事し辛くも母の貧苦を欠かざるを得たりき年長ずるに及びおひ〳〵獨立の稼業を得て精勵至らざる所無く母亦漸く糊口の不自由を免かるゝに至りしが未だ十年ならざるに新三郎亦眼疾を患ひ遂に盲目の身とはなりぬ、新三郎は是より按摩術を習得して一心專念母の爲に生業を營みて孝養を盡し居たりしが母の眼疾は次第に重躰に陷り遂に全く明を失ふに至り身軀且つ老衰して行歩心に任せず只病の床に臥し勝の身となりしにぞ新三郎孝養ます〳〵篤く孝順の志操を變ぜざること今日に至るまで二十有餘年殆んど一日の如く其奇特なる振舞には一鄕感ぜざるもの無かりしが、埼玉縣知事秋原汎愛氏は此孝子が善行を耳にし、去る頃褒狀に添へて金五圓を下賜せりとぞ。

◎雜　事

●前橋機業場設立の計畫　同市は從來器械、座繰共著大なる産出を爲しつゝあるが、地體我國の生絲業なるものは概して半年事業とも云ふべく、初夏に始まり秋末若くは初冬の頃に至れば、悉く繰製が休止するものなれば夫れに從事して細貲を受け、生計の料らひを立てつゝある女工の七八分は閉業後の小半年は絶えて稼業のあらざるを慨し、如何にかして恰好の事業もがなと望み居る狀態なるが、茲に同地有力なる實業家相謀りて、前記無業の婦女子を使用して産業を擴張せんとの目的を以て同地に一の大機業場を建設せんとて目下頻りに計畫中なりと云ふ。

●佛蘭西の女子中學　佛蘭西は、第二帝國の滅亡後、女子の教育事業に對し、著るしき設備を爲せり。佛蘭西の少し聞えたる都府にては女子中學校の設けあらざるはなく、如何なる都府にも、必ず一個の女子中學校を有し、巴里には五個ある上、今六つが建築中なり。すべて佛蘭西の中學校は、巴里の「アカデミー」にて監督し、女子の中學をも同じく此所にて監督す。此監督長は、センシール、オノタープ、グレアー氏にして、氏は右の「アカデミー」の會員の一人なり。

是等女子中學の學生の三分の二は寄宿生なり。これ佛蘭西にては、強く寄宿舍に入らんことを要求すればなり。唯巴里にある分は、寄宿生を受け付けず、其生徒數は、一校に大抵二百より五百の學生を有し、巴里にて最も古きはフエチロン中學、にして、拉丁町にあり。ラシーン中學、モリエール中學、ラマルチン中學、ヴイクトル、ユーゴー中學の如きは、最近に開かれたり。教授は男子女子ありて、假りに總計四十人ありとすれば、內五人は男子、三十五人は女子なり。中學には、何れも教員の休憩室附屬し、之につきての留守居あり、又若し必要ある場合には、一二の書記あり、此女子中學には、預科本科の二つありて、十二歳より十八歳迄の女子を教育し、此所を卒業したる者は、巴理大學の神學部に入ることを得。科目は論理、物理、化學、解剖學、生理學を必修科とし、博物、圖畫、音樂、体操は隨意科なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
紙數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

再販

近代歐米の讀書社界を震動し、劇塲に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を釋る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝこと切なり。即ち曩に其遺稿を收め、女子が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同存の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

故若松賤子英文集

嚴本嘉志子

一冊正價金六十錢
郵稅金六錢

小公子の譯者故若松賤子の英文述作に於けるや筆路頗る流麗なるを以て稱せらる。今此書は即ち女史が英文廿一篇を收めたるものにして、加ふるに女史の友師ブース氏及其他內外知友記する處の女史の小傳追憶記等を以てし、また女史の肖像を揭く。蓋し以て內外家庭の團欒の友となすべく、又以て尋常中學高等女學校等の英語教科書となすに眞好なりとす。

發賣所　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

『嚴本嘉志子』に對する批評

故若松女史が紀念にと、女史が英文の遺稿を集めて、其内外の知已及び其人嚴本氏の發行せしものなり。その文字の簡明にして好く選ばれたる、高雅にして然かもなづまざる、流麗清新の文まことに Queen's English の純なるものに耻ぢず。神田氏、頭本氏など今の英文士として知られたる人々の筆に成るものより、遙に自然にして生々したる心地す。否本國の女流と雖も、此文を成すもの蓋し少しとするに足るべきか。孤女學院を訪ふの紀の最初のあたり、少しく日本人が詩的形容の流獘に失したる憾みあれど、皇后陛下、皇太子殿下の御事を記し奉るの文字などめでたく覺ゆ。こし方行末と題せる終りの一文、又一つの書簡に函館難船の事を記せるもの最も筆力を見る。女子教育と基督新教とは最も深く女史が心に印せし如くに思はる。この有爲にして清新の思想を抱くの女史、早く故人となりてこの遺集をなす、これを惜しむもの、豈に其知已朋友のみならんや。

（文學界第四十七號明治二十九年十一月三十日）

東京裁縫女學校々長渡邊辰五郎著

裁縫教授書

全部三冊
定價金一圓
郵稅八錢

取次販賣　東京巢鴨村庚申塚　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY